

もうひとつの日本代表の軌跡

知的障がい者サッカー日本代表

第5回 INAS-FID 知的障害者サッカー世界選手権南アフリカ大会

2010年8月21日 - 9月12日

参加報告書



もうひとつの日本代表の軌跡



01	ご挨拶と選手派遣支援への御礼	天野直紀 日本知的障がい者サッカー連盟 理事長
02	ID サッカーのさらなる発展を	後藤邦夫 日本知的障害者スポーツ連盟 理事長
03	南アフリカ大会の成果と課題	小澤通晴 知的障がい者サッカー日本代表監督
06	大会参加のご報告	斎藤紘一 日本知的障がい者サッカー連盟 事務局
07	知的障がい者サッカーとは何か？	
08	もうひとつの世界カップのこれまで	
09	南アフリカ大会について	
10	日本代表の紹介	
12	南アフリカへの歩み	
14	資料	
16	サウジアラビア戦	
18	日本代表監督インタビュー	
20	フランス戦	
24	トルコ戦	
26	韓国戦	
28	資料	
30	代表選手の想い	日本代表選手
40	もうひとつのエピソード	
42	夢をありがとう！そしてこれからも	瀬戸脇正勝 静岡県サッカー協会ハンディキャップ委員会 副会長
44	僕の応援の形	鈴木幸一郎 フォトジャーナリスト
46	資料	

第5回 INAS-FID 知的障がい者サッカー世界選手権南アフリカ大会 ご挨拶と選手派遣御支援への御礼

第5回 INAS-FID 知的障がい者サッカー世界選手権南アフリカ大会の選手派遣におきまして、本当にたくさんのご支援をいただきました。世界選手権出場のご報告の冒頭におきまして、皆様に心よりの御礼を申し上げます。

この度の世界選手権への選手派遣は苦難の連続でした。一時は資金難により選手派遣が危ぶまれている時期もありました。大変なご心配をおかけいたしましたことを改めてお詫び申し上げます。

皆様の多大なご支援は資金面だけでなく、南アフリカでの選手の戦いにも大きな勇気を与え、そして、我々の活動が今後発展していくために大きな力になったこととは言うまでもありません。

知的障がい者サッカー日本代表が世界選手権に参加するのは、今回で3回目となります。参加には、日本サッカー協会元会長であり、当連盟の前身である日本ハンディキャップサッカー連盟の会長も歴任された故長沼健氏をはじめとした、多くの先人たちが、そして現在も尽力している日本各地の連盟スタッフや知的障がい者サッカーの指導者たちの存在があり、想いがあります。それに加えさらにたくさんの方の存在や想いが重なり合いました。世界選手権出場はその全ての成果であります。

「知的障がい者サッカー日本代表の世界選手権出場がピンチ」であることを知り、様々な手段で支援の呼

日本知的障がい者サッカー連盟 理事長 天野直紀

びかけをしていただいた方々。自ら企画を立ち上げ募金活動を展開していただいた方々。資金調達の方法を我がことのように共に真剣に悩み、アイデアを授けていただいた方々。そして、寄付による資金援助をしていただいた本当に多くの皆様。

このような多くの個人の力が結集して、日本代表が世界選手権に出場できたことは、我々に日本代表としての誇りをよりいっそう強く植え付けました。今大会に参加したどの国よりもチームが団結して闘い、フェアプレー賞を受賞する成果を手に来たのは、皆様のご支援により胸に刻み付けた日本代表としての誇りであることは間違いありません。本当にありがとうございます。

また、合宿などの現場の取材を通して、知的障がい者サッカーの状況を広く伝え、たくさんの方の心に訴えかけていただきましたメディアの皆様。ユニフォームやジャージ、飲料など多くの物品提供から資金面の支援まで、積極的に様々な援助をいただきました各企業の皆様、本当にありがとうございます。

今夏は、我々の世界選手権に先んじて、FIFAワールドカップの本大会が南アフリカで開催されました。そこでの日本代表の戦いに日本全国が感動と勇気ももらいました。知的障がい者サッカー日本代表も同様に勇気もらい、自分たちも多くの人に夢と感動を与えることを誓い南アフリカに降り立ちました。

その上、岡田武史前日本代表監督をはじめ、我々に勇気を与えていただいた日本代表選手からは、帰国後の多忙の時期にも関わらず、心よりの応援メッセージもいただきました。そして、Jリーグの球団や所属選手たちからも力強いメッセージを届けていただきました。同じサッカーを志す選手たちにどれほど力を与えていただいたことか、想像するに余りあります。本当にありがとうございます。

最後に、財団法人日本障害者スポーツ協会、日本パラリンピック委員会、独立行政法人福祉医療機構の皆様に感謝を申し上げます。

選手登録が複雑な知的障がい者スポーツにあり、大変なご協力をいただきました。ドーピング検査の講習をわかりやすく工夫して、選手への理解を促していただきました日本パラリンピック委員会。選手がアスリートとして活動するために、財団法人日本障害者スポーツ協会のご支援、ご指導はなくてはなりません。本当にありがとうございます。また、独立行政法人福祉医療機構からの多大な助成金がなければ南アフリカ行きの夢を叶えることはできませんでした。本当にありがとうございます。

本来、皆様一人一人に言及し御礼を申し上げるべきではありますが、ここで触れることは叶いません。何卒ご容赦ください。そして、どうか今後とも、知的障がい者サッカーの発展、障がい者スポーツの発展、サッカーの発展のためにお力添えくださいますようお願い申し上げます。

知的障がい者スポーツの発展を支え続ける
日本知的障害者スポーツ連盟理事長／
日本知的障がい者サッカー連盟顧問

後藤邦夫さんからのメッセージ

IDサッカーのさらなる発展を

ワールドカップが終わり、関係者はほっと一息ついたところだと思えます。今大会のINASの運営は、日頃大会をプロモートしている私たちにとっては、「え！世界大会がこんなこといいの？」という感想を抱かせるような状況であったようです。私が参加した一昨年のチェコで行われたグロバルゲームも、いくつかの競技で信じられないような運営で、同行したJPCの関係者の方の大会に関する評価を低く位置づけさせていました。徐々に改善されていくものと信じておりますが、今一度、日本で整然とした運営で大会を開催し、『大会とはこのように運営するものだ』という実例を示したいものです。

現在サッカーは、我が国において最も組織的に振興がなされ、それが成功したスポーツと評価されています。学齢期のクラブ人口はそれまで1位だった野球を抜き去り、また、高齢世代においても、50代、60代の対戦が生まれ、草サッカーに興じています。指導者組織も、グレードに分かれたヒエラルヒーが厳然と存在し、それに付随して指導の方法論が画的になされ、日本のどこにおいても、同様なレベルの指導が可能となりました。それゆえ、全国高校サッカー選手権では、これまで名門、サッカーどころといわれた県や学校が

上位を占めていた勢力図も、サッカーでは無名だった県や学校が上位に顔を出すような環境になりました。

知的な障害のある人たちに目を転じてみれば、チーム数は団体競技としてはダントツの1位です。マリノス他Jリーグ所属チームの社会貢献活動の展開、世の中のサッカーブームもその原因の一つと言えますが、何よりも自らの自由な時間を『子どもたちにサッカーを教えたい・・・』そんな熱い思いを持ってサッカーに関わっている人の増加が要因となっているのではないのでしょうか。

サッカーは、英国のパブリックスクールで教育の一要因として重要視され、教員・生徒ともども熱くなつて取り組んできた活動です。ですから、サッカーの真髄は人間の教育にあります。そのことはサッカーに関わる全ての人が忘れてはならないものであると思います。「勝ち負け」と同等に、いやそれ以上に人間としての生き方・あるべき姿をサッカーを通して追求していくことが肝要だと言えます。

サッカーを生業としている人の中には、「勝つ」とことによつて得られる経済的な利益を優先して、勝たなかった場合に、いけないと分かっているにもかかわらず、勝たなかったシャツやパンツを引つ張るプレーが、最近では当たり前となつており、アマチュアのプレーの中にもそのような反則、非紳士的な行為が散見されるようになりしました。そのような社会的な風潮に流されることなく、『IDのサッカーはすがすがしい!!』という

評価を常にもらい続けるよう、心していきたいものです。そのことが、私たちのサッカーがさらなる飛躍を続ける必要条件ではないのでしょうか？

サッカーを通して、世直しをしていきたいものです！

第5回 INAS—FID 知的障がい者サッカー世界選手権 南アフリカ大会の成果と課題

日本知的障がい者サッカー日本代表監督／
日本知的障がい者サッカー連盟副理事長 小澤通晴

今回の大会はドイツ大会に比べ、オランダ、サウジアラビアの2チームの力が突出していた。両チームは、高い個人の能力を基礎とした戦術がチームとして機能しており、ゴールを奪うこと、ボールを奪うことをチームとして意図的に行うことができていた。その他のベスト8に入ったチームは、攻撃はまだ個の能力に頼る部分が大きく、守備に関しては前に出ることは強いが裏へのケアやグループで意図的にボールを奪うというところまでは至っていない。

日本はドイツ大会に比べ、ボールを止める、蹴る、運ぶという基本技術は上がっている。しかし、世界との戦いでは、相手のプレッシャーが上がる。それに対応するべく、自らのスピードが上がった時には、まだ基本技術面でのミスが続発する。

また、走るスピード、パスの速さ、シュート力(特に20〜30mのミドルシュート)に差がある。国内では通用するボールを受けてからのドリブルはこの大会ではほぼ通用しなかった。ボールを受ける前の準備、駆け引き、そしてサポートがないと現在の日本の選手のスピードでは世界相手には通用しない。

一方、戦術理解、特に守備ではゲームごとのシステム変更などにも対応できる力は確実だった。5対5や8対8のトレーニングの中で、相手の攻撃を遅らせたり、危険なエリアをバランスを保って守ること、シ

ステムの変更への対応力などがついた。

しかし、やはり守備面でも基本、そして守備の本質であるボールを奪いに行き、奪い取ることがなかなかできなかった。ファーストディフェンダーがもつと激しくチャレンジし、セカンドディフェンダーがカバーし、奪うことをもつと徹底しなければならぬ。ディフェンスの技術的な改善点としてはヘディングのボールの落下地点の予測、相手に手をかけない、両足での大きなキックが蹴れること、そしてオフのポジションニング、GKのコーチングなどがあげられる。

今回、20名の選手を連れていったが、レギュラー組(13名)とサブ組(7名)の力には差があり、ほぼ固定の選手しか使うことができなかった。怪我人が出た時はポジションの変更で対応した。世界と戦える20名の人材がないことも大きな課題である。

今大会ではベスト8国との個人の能力の差を感じている。チーム戦術としては守備、攻撃とも理解し、紅白戦ではできるようになった。

しかし、国際大会でのボールを奪う、ゴールを奪うという肝心なところの技術不足を感じている。チーム戦術は個人の能力不足を補うものではない。個人の能力をさらに数ランク上にあげなければベスト8は遠い。決勝に進出したサウジアラビアやオランダはドイツやオランダのプロ2部リーグで活躍する選手が複数いる。日本の選手はアマチュアの都県リーグ2部でや

れる選手が2〜3名いる程度である。小学校年代からのサッカーの普及と中学・高校生年代の若手の発掘、強化育成が今後の日本の知的障がい者サッカーの発展のためには必要である。

現在の代表選手は強豪国とも良いゲームが出来るようになってきたが、予選リーグ2敗、順位決定戦で一分けとまだ勝つところまでに行っていない。この南アフリカでの3週間で選手たちのレベルはどんどん上がってきた。それは逆に日頃サッカーを行える環境がないということにもなる。会社勤めしている選手は、良くて週1回40分の試合のみという選手が多い。この環境では世界と闘い、勝つことは難しい。

現場の指導者は大変であるが、何とかこの環境を変えなければならぬ。代表選手を7名出した東京都は平日ナイターで2回、土日は試合と週3〜4回のトレーニングを行っている。全ての選手がこのような環境の中でトレーニングできるように各地域の指導者の方々に努力を続けてもらいたい。

組織としての課題は、日本知的障がい者サッカー連盟と日本サッカー協会との関係がある。現在、日本知的障がい者サッカー連盟は日本サッカー協会に加盟していない。2014年のブラジル大会には諸問題を解決し、日本サッカー協会に加盟し、フル代表と同じユニホーム、胸にはやたガラスのエンブレムをつけた知的障がい者サッカー日本代表選手が世界の強豪国に勝つ姿をなんとしても多くの方に見ていただけよう尽力したい。





知的障がい者サッカー世界選手権南アフリカ大会 参加のご報告

このたび、日本知的障がい者サッカー連盟では国際知的障がい者スポーツ連盟主催の第5回世界選手権南アフリカ大会に無事参加することができました。

これまで同様、また、今回はそれ以上に大会への参加自体が苦難の連続でした。そのような状況で、世界選手権という、我々にとつての最高の舞台に立てたことは何よりも最上の喜びであり、参加のために力を尽くしていただきました本当に多くの方々に感謝を申し上げます。

今大会の成績は参加16チーム中（5チーム棄権）10位という成績でした。これは過去最高の成績でありましたが、我々が当初目指した決勝トーナメント進出、そしてベスト4進出には遠く及びませんでした。

しかし、知的障がい者サッカー日本代表は確実に進歩しております。予選リーグでは、決勝トーナメントの常連であるフランスが0対8という大差で敗北を喫した前回王者のサウジアラビアに対して、0対4という闘いをしました。その内容も単に受け身に回ることなく、自分たちの目指す戦術を少しでも実行しようと積極的な闘いをいたしました。

まだまだ世界との差はありますが、このような闘いぶりは今後に期待を抱かせる内容であり、最終的にはフェアプレー賞を受賞し一定の成果をあげることができました。夢の続きはブラジル大会につながっていくと確信しております。

当連盟が世界選手権に日本代表を派遣することには

日本知的障がい者サッカー連盟 事務局 斎藤 絢一

いくつかの意味があります。

ひとつは、サッカーに夢中になり、世界選手権での活躍を夢見る選手の夢を実現することにあります。彼らの夢を実現することは、選手一人一人の成長を促すものです。この世界選手権大会の理念にもある、選手の成長が知的障がいを持つ選手の精神的な自立に大きな意味を持ちます。自ら考え行動すること、自己主張をすることを苦手とする彼らが、異国の地で夢を持ち、チームとともに努力していくことは日常にはない人生の財産になる経験をもたらします。

それだけではありません。そんな彼らの闘いを通して、知的障がい者サッカーを行う青少年に大きな夢を与えるものもあります。知的に障がいがあることを超えてサッカーが与える影響は少なくありません。反復練習をし、継続することで自らに自信を持つこと。それが日本代表として世界選手権で活躍することにもつながっていることを実感することができれば、選手のレベルに関わらず、一人一人の自立にも必ずやつながり、夢のある人生をもたらします。

我々が取り組んでいるのは知的障がい者サッカーという、知的障がい者スポーツでも、サッカーでもほんの一部門に過ぎません。しかし、そこに五千人を超えるプレーヤーがいます。その彼らがいる限り我々に与えられた責務は決して小さくありません。そして、この活動がその他の知的障がい者スポーツやサッカーとの関わりを通して、知的障がい者を含むより多くの

人々の人生が豊かになることの一助になることを願ってやみません。

選手団が南アフリカへ出発した8月20日。成田空港には50人を超える方々が激励に訪れました。キャプテンの宮原選手はその場で誇りを持って闘うことを誓いました。そして、予選で敗れた時には、お世話になった方に勝って恩返しができなかったことを、悔いて涙を流す選手がいました。帰国して数日後、既に練習を再開していた野澤選手はラジオの取材にも対して、次のブラジル大会を目指すことを誓いました。

私はそんな彼らの姿や成長を見るにつけ、今はまだ小さい輪であっても、そこには確実に根付く人の想いや絆があることを心強く感じています。

今後我々は知的障がい者サッカーがますます日本に広がるための普及活動、そして選手一人一人、また日本代表の強化活動の両輪がしっかりと回るよう尽力していく所存です。今はまだ小さな輪がより大きな輪になつていくよう、どうか皆様、今後ともご支援ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

知的障がい者サッカーとはなにか？組織から代表選出まで 知的障がい者サッカーについて

知的障がいは一般的に見えにくい障害とされています。身体に合併的な症状がみられるケースはありますが、知的障がい自体は身体の障害ではないからです。

■知的障がい者とは？

知的障がい（ちてきしょうがい）とは、一般的には金銭管理・読み書き・計算など、日常生活や学校生活の上で頭脳を使う知的行動に支障があることを指します。発達期（おおむね18歳未満）において遅滞が生じること、遅滞が明らかであること、遅滞により適応行動が困難であることの3つを要件とします。

具体的には知的検査（IQ検査）にて知能指数が70ないし75未満（以下）のものといった定義がなされています。

知的障がい者サッカーは世界中で行われている、いわばサッカーのひとつのカテゴリーです。そのため、国際組織や国内組織があり、様々な関わり方をしています。

■知的障がい者スポーツの国際組織

知的障がい者サッカーは世界各国で行われていると思います。それはサッカーだけでなく、ほかの競技でも同様です。それらを取りまとめているのが、国際知的障がい者スポーツ連盟（通称：INAS-FID）という機関です。各世界大会の開催や今後のパラリンピックへの参加、世界における知的障がい者スポーツの普及活動もこの機関が中心となって進めています。

86年に設立され、現在は、イギリスのウエイクフィールドに本部を置き、およそ90の国と地域が加盟しています。なお、今後のパラリンピックへの参加のために、国際パラリンピック委員会（通称：IPC）と連携を行うのも同機関です。



今回の世界選手権南アフリカ大会の開会式での様子。南アフリカ国内のスポーツやサッカーに関わる組織が大会運営のサポート行いました。左から二人目が INAS-FID の幹部。
photo : Koichi Saito

■知的障がい者スポーツ／サッカーの国内の組織

一方、日本知的障がい者サッカー連盟は、国内では障がい者スポーツを取りまとめている財団法人障害者スポーツ協会やその中の設置機関である、日本パラリンピック委員会（通称：JPC）の所属団体として活動しています。そして、このたびの世界選手権の選手派遣だけでなく、強化や普及も日本知的障がい者サッカ

ー連盟を中心に組織化されています。まだ、不十分な面もありますが、今後益々の知的障がい者サッカーを発展させていくためにも大切な組織です。

○全国組織

日本知的障がい者サッカー連盟（東京都府中市）

○都道府県（知的障がい者サッカー連盟設置）

北海道／茨城県／埼玉県／千葉県／東京都／神奈川県

静岡県／愛知県／滋賀県／兵庫県／長崎県／山口県

※このほか、各都道府県障害者スポーツ協会による運営もある

■代表選考方法

○全国障害者団体でのスカウティング

○チャンピオンシップ大会でのスカウティング

※09年度まで岐阜県にて開催。10年以降は未定

○地域トレセンからの推薦

関東／東海／関西

← ○代表候補合宿

代表スタッフによる代表候補合宿

南アフリカ大会へ向けては、2009年12月から開始

■選手選考の基準

○サッカーの技術（止める・蹴る・運ぶ）

○フィジカル（体格、スピード、パワー、フィジカル

コンタクト）

○闘志（ゲームの中で闘う気持ち）

○理解力があり、それを実行できること

○人間性や生活態度

○質の高いトレーニングを継続的に受けることができる環境など

もうひとつのワールドカップのこれまで

INAS-FID 知的障がい者サッカー世界選手権大会は、通称「もうひとつのワールドカップ」と呼ばれています。

94年にオランダで初めて開催されたこの大会は、世界中の国が知的障がいカテゴリーの代表選手を派遣してチャンピオンシップを争うとして続いています。

02年日本大会より、オリンピックとパラリンピックのように、FIFAワールドカップ開催年に同じ開催国で行われる4年に1度の祭典となっているためそのように呼ばれています。

なお、この大会はFIFAルールに則り試合が行われており、近年では優勝を争うチームでは、ヨーロッパのプロ2部リーグで活躍する選手の参加も見られるようになってきています。そのほか、競技性だけでなく大会運営やいろいろな活動の中で、知的障がい者自身の成長と地域社会との交流も目的とされています。

日本はこの大会には、02年のFIFAワールドカップ日韓大会の後に行われた、日本大会より参加をします。

また、障がい者サッカーの世界選手権大会は知的障がい者サッカーだけではなく、他の障がい者サッカーでもそれぞれの運営方法でおこなわれており、それぞれの日本代表が出場しています。

■これまでのINAS-FIDサッカー世界選手権大会

○第1回大会 94年 オランダ、ホーグベーン市

優勝…ルーマニア

準優勝…スロヴァキア

参加…オーストリア、イングランド、デンマーク

ベルギー、ドイツ、ギリシャ、オランダ

ポルトガル、南アフリカ、スウェーデン

計12の国と地域

○第2回大会 98年 イギリス、レスター市

優勝…ポーランド

準優勝…ブラジル

参加…ブルキナ・ファソ、イングランド、ドイツ

マリ、メキシコ、オランダ、ポルトガル

ロシア、スコットランド、南アフリカ

スペイン、スウェーデン

計15の国と地域

○第3回大会 02年 日本、東京都・神奈川県

優勝…イングランド

準優勝…オランダ

参加…ロシア、ドイツ、ポーランド、ポルトガル

ハンガリー、メキシコ、ブラジル

南アフリカ、マリ、日本、韓国、香港

インド、サウジアラビア

計16の国と地域 ※日本は10位

○第4回大会 06年 ドイツ、

ノルトランルヴェストファーレン州

優勝…サウジアラビア

準優勝…オランダ

参加…イングランド、ドイツ、ハンガリー

北アイルランド、フランス、ポーランド

ポルトガル、ロシア、オーストラリア

ボスニア・ヘルツェゴビナメキシコ、

日本、韓国、オーストラリア、南アフリカ

計16の国と地域

※日本は11位

(イングランド、ドイツは失格)



ドイツ大会の開幕試合、日本対ドイツ戦の様子。3万人の大観衆の中で行われた試合は0-3でドイツが勝利した。 photo: JFFID



ドイツ大会の日本代表選手たち。日本大会から引き続き選出された選手や高校生の選手など幅広い選出がされた。 photo: JFFID

南アフリカ大会について

大会正式名称：第5回 INAS-FID

サッカー世界選手権 2010 南アフリカ大会

英語表記：INAS-FID 5th World Football

Championships 2010

大会期間：2010年8月21日～9月12日

開催都市：南アフリカ共和国、

リンポポ州ポロクワネ市およびその周辺地域

運営主体

：国際知的障がい者スポーツ連盟
(通称：INAS-FID)

参加国数

：16カ国
：約480名

選手約320名・役員約160名

派遣主体

：日本知的障がい者サッカー連盟
〒183-0015 東京都府中市

清水が丘1丁目5番地8 202

電話 042-20712686

E-mail info@nhfs.jp

日本選手団

：26名(選手20名・役員6名)

試合形式

：FIFAのルールに準ずる。4カ国
4グループに分かれ3試合のグルー
プリーグ。上位2チームは決勝トー
ナメントへ進出。下位2チームは順

位決定戦へ。各国6試合を実施。

大会会場

● Peter Mokaba Stadium

ポロクワネ市内 18000人収容

● Oscar Mpetha Stadium

リンポポ大学内 5000人収容

● Nkawkawa Stadium in Tzaneen

ポロクワネ近郊 18000人収容

● Giyani Stadium in Giyane

ギヤニ市 18000人収容

日程

8月18日(水) 成田直前合宿

：8月18日～20日

8月20日(金) 成田空港発

シンガポール経由

8月21日(土) ヨハネスブルグ着

バスにてポロクワネへ移動

General Meeting

8月22日(日) 選手登録確認

8月23日(月) 開会式、開幕試合

Peter Mokaba Stadium

8月28日(土) サウジアラビア VS 日本

Peter Mokaba Stadium

8月31日(火) フランス VS 日本

Peter Mokaba Stadium

9月1日(水) 決勝トーナメント

又は順位決定戦

9月11日(土) 決勝戦&閉会式

Peter Mokaba Stadium

9月12日(日) ヨハネスブルグ空港へ

ヨハネスブルグ発

9月13日(月) シンガポール経由

成田空港着

解団式後解散



南アフリカ大会の開幕式。
FIFA ワールドカップでも使
用された、ピーター・モカバ
スポーツコンプレックスに
併設されたピーター・モカ
バ・スタジアムで行われた。
photo : Koichi Saito

「闘志なき者はグラウンドを去れ」

日本代表の紹介

代表のコンセプトは「闘志なき者はグラウンドを去れ」。目標はベスト4。もうひとつのW杯に参加した選手・スタッフは29名。北は秋田県、南は長崎県、15歳から30歳まで、日本を代表する選手が集結。スタッフも監督、コーチだけでなく、トレーナーも配備され充実した態勢で臨むことができました。

 <p>櫻井 嵩比都 DF/3 茨城県 日本メクトロン(株) 20歳 初</p>	 <p>加藤 隆生 GK、DF/17 秋田県 株みらい 21歳 ドイツ</p>
 <p>出雲井 恭兵 DF/4 東京都 佐川急便(株) 22歳 ドイツ</p>	 <p>堀内 拓哉 DF/2 島根県 株池田造園 20歳 初</p>

 <p>浦川 優樹 MF/9 東京都 株ホンダカーズ 19歳 ドイツ</p>	 <p>邊田 光夫 MF/7 静岡県 株小糸製作所 30歳 日本、ドイツ</p>	 <p>宮原 優樹 DF/5 東京都 株ビックカメラ 29歳 日本、ドイツ</p>
 <p>野澤 雄太 MF/10 東京都 佐川急便(株) 23歳 ドイツ</p>	 <p>坪 一二三 MF/8 茨城県 茨城福祉工場 20歳 初</p>	 <p>村山 翔太 DF/6 東京都 佐川急便(株) 19歳 初</p>

 <p>森山 憂多 FW/15 千葉県 千葉県立富里特別支援学校 15歳 初</p>	 <p>熊崎 将大 FW/13 岐阜県 株山共 21歳 初</p>	 <p>坂野 達也 FW/11 長崎県 旬県央広域事業センター 19歳 初</p>
 <p>高野 孝一 FW/16 島根県 旬セキュリティタスク 25歳 ドイツ</p>	 <p>笠原 健 FW/14 静岡県 静岡県立藤枝特別支援学校 18歳 初</p>	 <p>山本 匠伍 GK/12 愛知県 愛知県立豊田高等養護学校 18歳 初</p>

※プロフィールは上から
名前、ポジション/背番号
出身地、所属、年齢、出場歴

 <p>秋山 大 日本代表最終候補 MF 茨城県 日本畜産振興(株) 24歳</p>	 <p>浅津 友伸 MF/20 島根県 島根県臨時職員 19歳 初</p>	 <p>草信 政裕 GK/18 兵庫県 兵庫県立 姫路特別支援学校 17歳 初</p>
 <p>小澤 通晴 監督 東京都立 武蔵台特別支援学校 日本、ドイツ</p>	 <p>五十嵐 滉太 MF/21 東京都 株高島屋 19歳 初</p>	 <p>長島 幸佑 MF/19 島根県 モルツウェル(株) 23歳 ドイツ</p>



南アフリカ大会に臨んだ日本選手団。総勢 30 名の選手・スタッフが一丸となってチームを支えた。photo : Shogo Yazawa

<p>天野 直紀 副務 NPO 法人 日本知的障害者サッカー支援機構 初</p>	<p>小山 良隆 主務 横浜ラポール 日本、ドイツ</p>	<p>木村 純一 トレーナー 東京都立 武蔵台別支援学校 初</p>	<p>古谷 秀樹 コーチ 東京都立 足立特別支援学校 初</p>
<p>斎藤 紘一 副務 NPO 法人 日本知的障害者サッカー支援機構 初</p>	<p>利根川 俊介 副務 (社副) こうよう会 初</p>	<p>澤野 啓祐 トレーナー アクア鍼灸接骨院 初</p>	<p>柳澤 繁 GK コーチ 東京都立 武蔵台別支援学校 ドイツ</p>

南アフリカへの歩み 日本代表2010年のスケジュール

南アフリカへ向けた日本代表の強化は、2010年の4月から始まりました。数度にわたる代表合宿を重ね、本大会へ向け準備をしました。

桜の季節、4月。日本代表は合宿を重ねるだけでなく、外国人選手との対戦を見据えた強化試合や一人でも多くの方に知っていただくために壮行試合を行いました。

6月。雨が降る中、韓国との親善試合で海外遠征を経験。資金難に苦しみながら、助成金やたくさんの方の寄付、募金が集まり大会の参加が決定した後は、壮行会で応援していただいている方の前で大会へ向けた強い決意表明を行いました。

およそ半年にわたる南アフリカ大会へ向けた日本代表の歩みの中には、多くの方から声援をいただく機会や仲間と信頼を深める時間、そして代表の最終発表の悲喜こもごもなど、単なるサッカーの練習だけにとどまらない濃密な時間が流れていました。どれも欠けても、南アフリカへの道は開かれませんでした。

この貴重な時間と経験は、今でもしっかりと体に、そして心に刻まれ、選手、スタッフ、知的障害者サッカーの未来のために受け継がれていきます。

4 - 5月 はじまり



4/18に行われた壮行試合。会場にも多くの観客が応援に集まった。試合後はレインボーによるチャリティオークションも開催され、収益は日本代表の遠征費として寄付された。
(photo : Koichiro Suzuki)

- 4月17日(土) 日本代表強化試合(横浜 YCAC)
対 British FC、対 昭和大学 OB
- 4月18日(日) 日本代表壮行試合(代々木公園サッカー場)
対 レインボー、対 ザ・ミイラ
後援：東京都、財団法人日本障害者スポーツ協会
財団法人日本知的障害者福祉協会
※アースデイ東京2010関連イベントとして開催
- 4月24日(土)、25日(日) 日本代表候補合宿(茨城県波崎)
※独立行政法人 福祉医療機構 による助成事業
- 5月22日(土)、23日(日) 日本代表候補合宿
※関東トレセンと合同で代表候補一部の選手で実施。

6月 初の海外遠征へ



得点を決めて喜びのパフォーマンスも。大荒れの天気の中行われた韓国遠征。お互いに声を掛け合い試合を進めるなど、この遠征頃からチーム戦術が徐々に浸透してきました。
(photo : Koichiro Suzuki)

- 6月12日(土)、13日(日) 日本代表候補合宿(茨城県波崎)
※独立行政法人 福祉医療機構 による助成事業
- 6月24日(木)～26日(土) 日韓親善試合(韓国、濟州島)
対 韓国代表、対 濟州島選抜チーム
大韓民国障害者サッカー協会との共催行事



試合は6-2で勝利、大会終了後はお互いに鬨いをたたえ合い、南アフリカでの健闘を誓い合いました。
(photo : Koichiro Suzuki)



大会出発が1ヶ月後に迫り、合宿を経て、いよいよ代表選手20名が絞り込まれました。
選手の練習中の表情には気合いがみなぎるものの、月に一度の合宿しかできなかったため、チームとしての完成度はまだ高いものではなかった。(photo: Koichiro Suzuki)

7月 南アフリカへの20名選出

○7月17日(土)～19日(月) 日本代表候補合宿(茨城県波崎)

※独立行政法人 福祉医療機構 による助成事業



8月 旅立ちのとき

○8月7日(土)、8日(日) 日本代表候補合宿

※関東トレセンと合同で代表候補一部の選手で実施

○8月8日(日) 日本代表壮行会(ラフォーレ原宿ミュージアム)

後援: 財団法人日本障害者スポーツ協会

協力: ラフォーレ原宿、企画制作 Ubdobe

○8月18日(水)～20日(金)

日本代表合宿(千葉県成田市)

※独立行政法人 福祉医療機構 による助成事業

○8月20日(土)～9月13日(月)

南アフリカ遠征

※大会詳細は別ページをご覧ください



南アフリカへ向けた合宿は土のグラウンドではじまった。3000mの高地での試合が続くため、肉体的に追い込んでいく練習の日々。それとともにチームが寝食をともにする生活スタート。
(photo: Koichi Saito)

資金難に直面して

日本代表の南アフリカへの道は決して平坦なものではありませんでした。社会人が大半を占め、日本各地から集まるため、強化スケジュールを組むのが大変難しい状況でした。それに拍車をかけるように資金難にも喘いでいました。

本当に南アフリカへ行けるのか? 選手、スタッフは行くことを信じながらも不安な日々を過ごしていました。

4月末の時点で遠征費用の1/4しか用意できていなかったからです。独立採算で運営されている日本知的障がい者サッカー連盟は、日本代表の遠征資金も自己資金で賄わなければなりません。

そのような状況で夢の実現を大きく後押ししたのは、まぎれもない多くの個人の方々の力です。

南アフリカへの遠征、強化費用はおよそ4000万円。そのうち、およそ1200万円が個人の方からの寄付や募金によるものでした。最終的には、独立行政法人福祉医療機構による助成金がおおよそ2000万円、アディダス社からのユニフォーム提供、企業寄付なども多数集まり、南アフリカ行きへの道が開かれました。

今回の日本代表のもうひとつのW杯への参加はそんな多くの人の夢や希望を背負って実現しました。

※資料1

【予選リーグ組み合わせ】

現地入り後、エジプト、メキシコ、アルゼンチン、ブラジル、ナイジェリアの棄権のため当初の予定より大幅な対戦の組み替えがありました。

Group	シード	抽選		
A	南アフリカ	ポーランド	韓国	ポルトガル
B	サウジアラビア	フランス	日本	
C	オランダ	ハンガリー	ドイツ	トルコ

【予選リーグ対戦日程】

NO	対戦チーム	日	時間	会場
1	南アフリカ (A1) VS ポーランド (A2)	8/23	16h30	PMS
2	オランダ (C1) VS ハンガリー (C2)	8/24	11h00	SS
3	ドイツ (C3) VS トルコ (C4)	8/25	11h00	PMS
4	サウジアラビア (B1) VS フランス (B2)	8/25	10h00	GY
5	韓国 (A3) VS ポルトガル (A4)	8/26	15h00	NK
6	オランダ (C1) VS ドイツ (C3)	8/27	11h00	OMS
7	ハンガリー (C2) VS トルコ (C4)	8/27	15h00	OMS
8	サウジアラビア (B1) VS 日本 (B3)	8/28	15h00	PMS
9	南アフリカ (A1) VS 韓国 (A3)	8/29	11h00	SS
10	ポーランド (A2) VS ポルトガル (A4)	8/29	15h00	SS
11	フランス (B2) VS 日本 (B3)	8/31	11h00	PMS
12	オランダ (C1) VS トルコ (C4)	8/31	15h00	GY
13	ハンガリー (C2) VS ドイツ (C3)	8/31	15h00	OMS
14	南アフリカ (A1) VS ポルトガル (A4)	9/1	15h00	OMS
15	ポーランド (A2) VS 韓国 (A3)	9/1	15h00	SS
	PMS=Peter Mokaba Stadium SS=Seshego Stadium OMS=Oscar Mpetha Stadium GS=Giyani Stadium NK=Nkowa-Nkowa Stadium			

【決勝トーナメント、順位決定リーグ対戦日程】

NO	対戦チーム	日	時間	会場
16	9-11順位決定リーグ ①	9/2	15h00	PMS
17	準々決勝 ①	9/3	15h00	PMS
18	準々決勝 ②	9/3	11h00	GY
19	準々決勝 ③	9/3	15h00	GY
20	準々決勝 ④	9/3	15h00	OMS
21	9-11順位決定リーグ ②	9/4	15h00	SS
22	5-8位決定戦 ①	9/5	15h00	SS
23	5-8位決定戦 ②	9/5	15h00	OMS
24	9-11順位決定リーグ ③	9/6	15h00	PMS
25	7、8位決定戦	9/7	15h00	OMS
26	5、6位決定戦	9/7	15h00	NK
27	準決勝 ①	9/8	15h00	PMS
28	準決勝 ②	9/8	15h00	SS
29	3、4位決定戦	9/10	15h00	GY
30	決勝戦	9/11	15h00	PMS
PMS=Peter Mokaba Stadium SS=Seshego Stadium OMS=Oscar Mpetha Stadium GS=Giyani Stadium NK=Nkowa-Nkowa Stadium				



開幕戦には地元 南アフリカが登場、たくさんの観客が詰めかけた。澄み切った空に、ブゼラの音が鳴り響き、スタジアムは FIFA 大会を彷彿させる盛り上がりを見せた。
(photo : Koichi Saito)

日本代表は、いよいよ「もうひとつのワールドカップ」の初戦を迎えた。遠く日本からの声援を力に、日本代表としての誇りを胸に日本代表の戦いがいよいよ始まった。

対戦相手は前回大会の王者・サウジアラビア。

冬の南アフリカ。しかし、ポロクワネは3000メートル近い高地に位置するため日中の陽射しは強く、気温も上がりやすい。夜の冷え込みとは打って変わり、この日も日中のピッチの気温27度。ブゼラの音が鳴り響く中、戦いは始まった。

ブンデスリーガ2部で活躍する選手を擁するサウジアラビアは、序盤から、自在なパスワークと両サイドから崩しをみせる。中盤でパス交換を行いながら、フォワードは常に日本の守備の裏を狙う。前線から引いてきたフォワードにパスを出し、ワンタッチもしくはキープして中盤にパスを戻す。フォワードについては守備の裏をつく攻撃を繰り返す。いわゆるくさびを使った誰もが知りうるスタイルだが、サウジアラビアの高い個人技が相手を混乱に陥れる。今回のサウジアラビアは常にこのスタイルで優位に試合を進めてきた。

一方、日本はディフェンスからフォワードまでがしっかりとした守備のブロックを形成し対応した。サウジアラビアの執拗で、かつ自在な攻撃に対して、精神的にもタフな戦いを挑んだ。ただ、追いかけて回すのではなく、ボールを奪うために時には我慢を強いられる戦い。それは南アフリカ入り後からずっと練習してきたスタイルだった。

10分過ぎ、お互いにシュートチャンスを迎える。日本は前半12分、左サイドのスローインから飛び出した

予選リーグ1回戦

vs サウジアラビア

日本 0 - 4 サウジアラビア

「初戦は前回王者に完敗」

だが世界を相手に闘う手応えを掴めた

南アフリカ共和国、リンポポ州、ポロクワネ

8月28日(金)、15時(日本時間、同日22時)

会場：ピーター・モカバ・スタジアム

(Peter Mokaba Stadium)

森山が巧みなボールコントロールでチャンスを迎える。ゴール前で背負いかけたディフェンダーをワンタッチで抜き去り、そのままシュート。惜しくもゴールキーパーの正面を突いたが、技術の高さを見せるには十分な場面だった。

しかし、20分過ぎ、右サイドでボールをキープするサウジアラビアに対してプレッシャーをかけ続ける日本は、ボールを下げたサウジアラビアに対して一瞬隙を見せる。サウジアラビアはその一瞬を見逃さなかった。センターサークル付近からロングシュート。ボールは緩やかに日本のゴール左隅に突き刺さり、均衡が破れた。その後、ミスも重なり前半に2点を失った日本は、後半開始早々にも失点。

(写真左、下) 南アフリカの治安を懸念して、今大会は家族の同行も叶わなかった。そのかわり、日本からはたくさんの寄せ書き入りの日の丸などメッセージが持ち込まれた。毎試合スタンドに掲げられたそれらが選手の気持ちを盛り上げチームに一体感をもたらせていった。photo: Koichi Saito



(写真次頁) 裏に走り込む選手をケアしつつ、ボールを持つ選手にもプレッシャーをかけるボランチの坪選手。無尽蔵のスタミナは90分間つきることがなかった。ただ、常に複数の選手が前に行く推進力はさすがのものがあつた。

photo: Shoichi Midoro



後半の序盤から中盤にかけては、サウジアラビアが中盤でボールをキープ。本来の戦いに持ち込んだサウジアラビアに対して、日本は守勢に回る一方的な展開となる。それでも日本は粘り強く守備網をひき、サウジアラビアに追加点は許さない。

何とか得点の欲しい日本は、森山と野澤のゴール前のパス交換からシュートを放つが決まらず、その後も最後まで守備に奔走し試合終了。

予選リーグ突破に沸くサウジアラビア代表とは対照的に、得点以上の差を見せつけられた日本選手の中には涙する選手さえいた。しかし、確実に意図のある戦い方が浸透していることは実感できる内容だった。

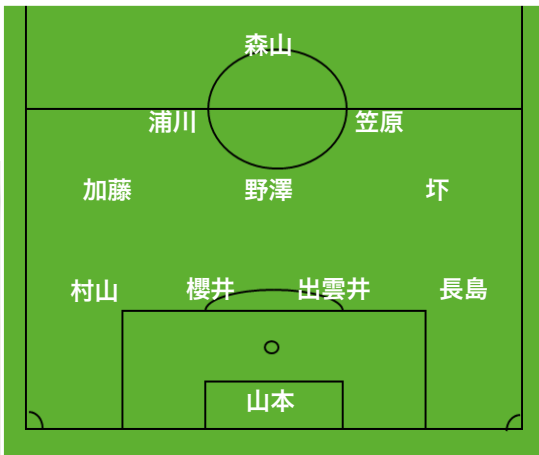
完敗を喫した日本代表。王者サウジアラビアとの力の差を痛感せざるを得ない内容だった。しかし、技量の差を埋める戦術や誇りを持って果敢に戦いに挑んだ勇氣、そしてサウジアラビアの力が突出している現状を考えると世界との力は確実に縮まっているコトが実感できる戦いだったといえる。

何よりその戦いぶりは、フル代表を頂点とした日本代表の中で、確実に一つのカテゴリの代表としてのものだったことは間違いない。先のワールドカップで見せたフル代表の戦いから勇氣をもらい、今度は自分たちが世界を驚かせる。その夢は叶わなかったが、数少ない世界との戦いの舞台で日本ならではの緻密な戦術を遂行する能力を見せた。このカテゴリでも世界と戦うことができる。それがサウジ戦で、平均弱冠20歳の若者達が得た最大の収穫だったといえる。

(取材・文／斎藤紘一)

日本の布陣は4-5-1。森山を中心とした3人がパスの出所をしっかり押さえることで、ラインを保つ4バックと3ボランチが狙いを絞ってボールを奪いにいくことを狙いとした。サウジアラビア相手に通用した部分としなかった部分を分析することが決勝トーナメントをかけた次戦に向けた鍵となる。

【得点者】
サウジアラビア
22分 Nasser Huraysi
36分 Fahad Harkan
42分 Burj Muawwadah
47分 Omer Kaseer



小澤代表監督インタビュー

サウジアラビア戦を振り返って

今大会のために強化をしてきた日本代表。サウジアラビア戦はその成果がどのように現れていたのか？世界との差はどこにあるのか？この日の戦いをどのように評価したらよいか02年の日本大会にはアシスタントコーチを務め、06年のドイツ大会から日本代表監督を務める小澤通晴監督は、試合後のミーティングが終わり複雑な表情を浮かべながら話を切り出した。

「私が知的障がい者サッカー日本代表に関わるようになった02年からやってきたことやサウジアラビアというチームを分析した結果を受けて、今我々ができることはできた手応えは掴めた」とまずはサウジ戦に対して一定の評価を語った。小澤監督が初めて知的障がい者サッカーに関わった当時は振り返る度に、その苦勞を伺い知ることができる。02年の日本代表の練習は「インサイドキックを蹴る」などの基本練習に終始したという。そこから8年の月日が流れ、相手チームを分析し、戦術を持って試合に臨む、それも前回王者に対してだ。そのこと自体が知的障がい者サッカーの歴史を知る者にとつては、手応えをつかむ進歩だったに違いない。

では、小澤監督の目指すサッカー、彼らに要求するサッカー像はいつどこにあるのか？多くの人が知的障がい者サッカー、と聞くだけでは想像できない最高のパフォーマンスとはどういうものなのだろうか。



2002年日本大会から代表スタッフ入りした小澤氏はドイツ大会、そして今回の南アフリカ大会で監督としてチームを牽引した。一貫して世界と戦うためのチーム作りを追求してきた。基本技術もままならなかった2002年大会。現在ではチーム戦術を要求するレベルにまで到達。時には厳しく叱咤し、そして我慢強く、温かく選手に接する。

通常は特別支援学校の教諭として勤務し、部活動を指導。知的障がい者サッカーの底辺の拡大、選手の発掘に腐心している。
(Photo : Koichi Saito : 3)

小澤監督はやや熱を帯びた口調で続けた。「予選リーグの戦い方としては、前からボールを取りにいつて大量失点するより、組織的にしつかり守りを固めてワンチャンスをもににする。こういう戦い方は間違いではない。今回は初めてやるシステムではあったが、守備面では人がスペースを埋めていくことやマークの受け渡しはだいぶできるようになってきた。」とやはり一定の評価は下している。

しかし、結果は敗戦だった。そこに話が及ぶと、監督が我々の想像するより遥かに高い目標と世界へ挑戦する意欲にあふれていることに気づかされる。

「これまで（国内で）彼らが対戦してきたような相手と違って、（世界大会での）技術があるチームからは、実際にボールを奪うことができなかった。今大会の対戦チームは、プレッシャーをかければミスしてくれるような相手ではない。ボールを奪うエリアをしつかり考え、狙いを定めてボールの出所、出しどころを限定していくような守備ができるように力を上げなければならぬ。そうしなければ（この戦術も）完璧ではない。また、攻撃面では、今日の試合、ボールを奪ってから攻撃へ切り替える体力が残っていなかった。体力だけでなく、守備から攻撃への移行する時の技術、パスやランの精度がまだまだ足りないし、やりきれないと感じている。」

徐々に試合の具体的なことに話が及んでいく。日本は、後半の序盤から中盤はずっと相手に自由にパスを回されボールを奪えないように見える時間があつた。この時間帯、選手はパスを取りにいけなかったのか？

それとも敢えて取りに行かなかったのか？ 選手はじられて戸惑っていなかったのか？ 直接的に聞いた。

「ベンチからはいかになくていいという指示を出した。とにかく精神的にはきつい戦い方だが、我慢してボールを追いかけながらも、行き過ぎないように、自分たちの守備の形を崩さないように、相手がじれてくるのを待った。」

相手は撒き餌を撒くような縦横自在にパスをまわしてきた。しかしそれは、言ってみれば呼び水であり、そこに食いついていってしまうと、ボールを取りに来た日本の選手の裏の空いたスペースを突かれてしまう。フランスはまさにボールを追いすぎて、裏をつかれて大量失点をしていた。

一点奪いにいくためにツートップに変更することも考えたが、フランスとの勝敗の関係もあるので、選手にこういうサッカーも、戦い方（するしかない相手）もあるんだということを知って欲しかった。」

常に冷静に相手の特徴を考え、自分たちの力量と比較しながら戦いを進める指揮官。監督はそれだけではなく、この試合を通して選手がより強くなることを願っていたように思う。

この試合を通して、対戦相手サウジアラビアは出場国の中でも、頭二つくらい抜けている印象があった。最後にサウジアラビアの印象を聞いた。

「（同じく強豪国の）ポーランドや南アフリカと比べても、二つとはいかななくても、頭一つ半は抜けている感じがする。」

ウォーミングアップではキレのある動きを見せてい



なかったが、それは本当ではなかった。

ボールコントロールや高さが特にすばらしい。パスをトラップしながら、行く方向へ1.5メートルは前に出られている。あれは、今の技術ではとても取れるものではない。どれだけ相手を捕まえていても、パスの入った時点で取りに行つては簡単に置き去りにされる。しつかり、ステイして（構えて）行かせないディフェンスを理解していないと対応できない。

ヘディングの高さも尋常ではなかった。日本の高校生でも、「この子はJリーグにいけるな」と感じる選手くらいの高さがあった。

このレベルと対等に戦うのはまだまだ時間がかかる。恐らくは。」

「ただ、とにかく彼らは本当によく戦った。体力的にもきつい中、本当に頑張った。今の彼らを考えると及第点をあげたい。」

現実を冷静に受け止めているのか、それとも悔しさをかみ殺しているのか。力の差を見せつけられたが選手にねぎらいの言葉をかけた。インタビューは終わり、他スタッフと談笑しながら、「ほんとに強かったな。ちきしょう」と、いたずらっぽい笑みを浮かべながら言った姿が印象的で、監督の本音を垣間見た気がした。

（取材・文／齋藤紘一）

春の風を感じるさわやかな天気。南アフリカは南半球にあり、秋に向かう日本とは真逆の季節。しかし、遙か上空からは強い陽射しが照りつける。

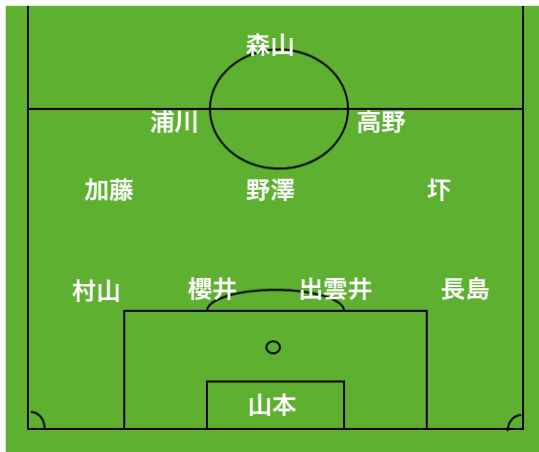
前回ベスト8のフランスを相手にどちらのチームも決勝トーナメントをかけた絶対に負けない戦い。今回も前回同様スタンドにはたくさんの日の丸が掲げられ、選手は想いを強くして臨んだ。

試合序盤は互角に見えた。フランスは前線からの守備と一対一の局面での仕掛け、日本の左サイドを起点に攻めてきた。日本はサウジ戦同様、ブロックをしっかり作り中盤でボールを奪い攻めに転じる。

しかし、開始4分。いわゆる、魔の時間帯。フリーキックからフランスの長身選手がゴール前にそびえ立ち、こぼれ球をあつさり決められた。

ただ、この日の日本はこれで気落ちしなかった。その後もセンターサークル付近から、執拗に相手を追いまわす。ボールを奪うと一転し、前線の浦川や高野に預け、前への意識を露にした。サウジアラビア戦からまた一歩前進した戦術が見られた。そして、前半12分、左サイドを突破した浦川がセンターリングを上げると、競ったこぼれ球をベナルテイエリアの外からエース野澤が左足を振り抜いた。ゴール右上隅にカーブのかかったシュートが決まる。駆け寄る選手をかき分けるように、ゴールを決めた野澤は突き上げた指をベンチへ向け走り、歓喜の輪へ飛び込む。貴重な同点ゴールとともに、南アフリカでの日本の初ゴールの瞬間だった。

しかし、歓喜も束の間、相手ミドルシュートと日本



【得点者】	【得点者】
4分 Christophe Derre	12分 野澤雄太
15分 Yannick Cabannes	69分 野澤雄太 (PK)
25分 Christophe Renault	
54分 Johnny Fouache	【選手交代】
90分 Kevin Fraincart	46分 IN 笠原 14 OUT 村山 6

予選リーグ2回戦 vs フランス

日本 2-5 フランス

「決勝トーナメント進出の夢破れる・・・」

9 - 11位順位決定リーグへ

南アフリカ共和国、リンポポ州、ポロクワネ
8月31日(月)、15時(日本時間、同日18時)

会場：ピーター・モカバ・スタジアム
(Peter Mokaba Stadium)

のミスからフランスに追加点を奪われる。前半は1対3で折り返す。

後半は村山を下げ攻撃的MFの笠原を投入。システムも2トップへ変更して得点を奪いに行く。日本は再三にわたり攻撃を仕掛けるが、決定機をいかせない。次第に、ボールの回りも鈍くなっていく。

逆に前がかりになったところから失点を喫してしまった。その後、スルーパスから抜け出した浦川が倒されPKで1点返したものの、終了間際に追加点を許し2対5で敗れた。

終わってみれば、この試合も力負けだった。

遠く異国から乗り込んできたサムライブルーは、レブルーの前に初の決勝トーナメント進出の夢を断られた。

経験不足を感じさせられた一戦だった。

日本代表はMFとDFの連動した守備から速攻を狙う。サウジアラビア戦よりも力の劣るフランス相手に、前回以上に守備は機能したように見えた。しかし、失点シーンはどれもミスや個人の力負けによるものであった。

世界戦が初めての選手もいる中、失ってはならない先取点を前半の早い時間に取られ浮き足立ってしまう。その後も同点に追いつくも、すぐに突き放されてしまう。後半は前がかりになる中、前線に3人、4人とべつたりと張り付き自らスペースを失ってしまった。恐らく彼らが持っているイメージとはかけ離れた戦いになってしまった。

個人技、体力ともにまだまだ足りない部分は多くあ



サウジ戦同様3ボランチを採用。前線から中盤まで体力の限りボールを追い回した。(photo : Shogo Yazawa)

る。しかし、それ以上にゴールや1対1での迫力は明らかに欠けていた。

知的障がい者サッカー日本代表のイレブンには国内では他の選手と明らかな力の差がある中、拮抗した相手と対戦した経験に欠ける選手が多くいる。それが、精神的な余裕や冷静さを損なわせ、自分たちにとつてのまさに「いつものサッカー」をしてしまったのではないか。その試合運びは世界仕様ではなかった。むしろ、世界仕様のひき出しがなかったのかもしれない。

試合後、「試合に負けて初めて泣いた」と話す選手が多くいた。負けられない戦いはそうは経験できるものではない。この経験は選手にとつてかけがえのないものとなり残つていくに違いない。しかしそれでも、このレベルの相手との試合を事前に経験できていればと感じる内容ただだけに、精神的に未成熟な部分が一際立つたことは気の毒ですらあった。

(取材・文／斎藤紘一)



前半 12 分、エース野澤の強烈なミドルシュートが決まった。



野澤に駆け寄る選手たち。



日の丸が掲げられたベンチ前で歓喜の輪ができた。

決勝トーナメント進出をかけたフランス戦。
南アフリカでの初得点、そして見えかけた決勝トーナメントが最後には走り去っていった。
チームに関わる全てのものが打ちひしがれた一戦だった。



試合に負け、失意の中クールダウンに向かう選手たち。



ロッカーに戻っても茫然自失の状態が続いた。この一戦にかけていた想いが募る。スタンドから声援を送ったスタッフや現地の人々も落胆を隠せない。



気丈に振る舞っていたはずのコーチ陣も落胆を隠せない。



強い日差しに照らし出された日の丸もなぜか悲しさを浮かべているようだった。

vs トルコ

日本 3 - 3 トルコ

劇的！ロスタイム同点ゴール

順位決定リーグ、トルコ戦で待望の勝ち点1

南アフリカ共和国、リンポポ州、ポロクワネ
9月2日（木）、15時（日本時間、同日18時）会場：ピーター・モカバ・スタジアム
(Peter Mokaba Stadium)【得点者】
1分 Baris Incedemir
17分 Cayan Kurnaz
21分 Baris Incedemir【得点者】
41分 森山慶多
85分 高野孝一
92分 高野孝一【選手交代】
62分 IN 坂野 11
OUT 笠原 14

決勝トーナメント進出の夢が断られたフランス戦から中1日、肉体的にも精神的にも疲労感が漂うイレブン。しかし、目標を見失ったわけではない。もうひとつのワールドカップ初のひと桁の順位を目指して前へ進まなければならない。

この日、新たなスタッフの到着と共に一枚の横断幕がスタンドには掲げられた。「志」。故・長沼健氏の言葉。

十一の心を持った日本イレブンが戦いに挑んだ。開始2分、日本は失点。その後もトルコのロングボールの対応に苦しみ、2失点を喫してしまう。日本は重苦しい展開が続く。中盤以降、再三にわたり相手ゴールに迫るものの得点できない。そんな中、今大会を通して成長著しい森山が待望の得点を奪う。前半はそのまま1対3で終了した。

前半途中にスタンドから「ニッポン」コールが沸き起こった。現地の子どもを中心にブゼラの音と共に日本への声援が増してくる。

後半、日本のペースでゲームが進む。野澤のパスから高野、森山が再三ゴールに迫るが決めきれない。逆に身体能力に勝るトルコも逆襲を仕掛ける。GK山本は前半に負傷を負っていたが懸命にゴールを死守。

トルコ選手の足が止まりはじめた後半42分、左サイドでボールを奪った日本は中盤の野澤から前線へ。トルコの浅いDFラインの裏へ抜け出した高野が飛び出したGKの頭上を越える技ありのシュートを放つと、ボールはきれいな放物線を描きゴールに吸い込まれた。

なおも日本は1点ビハインドのままロスタイムへ突入。中盤のこぼれ球を野澤が体勢を崩しながら、左サイドに展開。スペースに走り込んだ森山がゴール前に

切り込みファールを誘った。

左ペナルティエリア外の角度のない付近からFKキック。キッカーは野澤雄太。ゴールキーパーとFWの間に早いボールが入る。出雲井がGKと競り合う裏に、身長の高い高野が走り込み起死回生の同点ゴールが決まった。

ゲーム再開直後に試合終了の笛。日本は貴重な勝ち点1を拾っただけでなく、最高の雰囲気最終戦、韓国戦を迎えることとなった。

絶対にゴールを奪う気迫。それがこれまでの日本に最も欠けていたものかもしれない。

「絶対勝つぞー」。普段は無口の野澤が試合前のロッカールームでの円陣で声をあげた。しかし、試合は集中力の欠けた入り方をしてしまう。

そんな彼らの魂を揺さぶり、後押しをしたのはまぎれもない応援の力。今大会でどのチームよりも多く掲げられた横断幕、大きな声援を受けた日本代表。既に言い古されたことかもしれないが、彼らの戦いぶりは声援と共鳴し合い、そして土壇場で大きな力を生んだ。フル代表と違い、大歓声の中で試合をした経験の少ない彼らにとつては、代表としての誇りを感じる事ができた瞬間だったに違いない。

そして、その誇りは最終戦の日韓戦で改めて示されてこそ、日本代表という呼び名がふさわしい存在に成長していく階段をまた一歩上がる事ができる。次戦、「もうひとつのワールドカップ」での過去最高位の9位を駆け、最後まで力強く戦い抜く姿を見つめていきたい。

(取材・文／斎藤紘一)



「志」。十一の心。故・長沼氏は生前この言葉をイレブンの気持ちを象徴する言葉として用いた。(photo : Koichi Saito)



劇的な同点ゴール。魂のこもったプレーにスタンドも熱狂した。(photo : Koichi Saito)

9位のかかった大事な一戦。そして、南アフリカでの公式戦最終戦。

日本は高野のハットトリックの活躍などで快勝した。

前半は圧倒的に攻めるも決めきれない状況が続き、逆に速攻から逆襲にあい先制点を奪われる。

その後、不可解な判定により、森山が退場となり、結局そのまま0対1のまま後半へ。

ロッカールームに戻った選手たちの表情からは、ちぐはぐな攻めが続く展開にじりじりしている様子が伺えた。小澤監督からは精神的に粘るよう指示が飛ぶ。

後半に入り遠めからも積極的にシュートを狙っていく。まずは坪、森山のロングボールが効果的にゴール前に入り、高野、浦川がそれぞれ得点を上げ試合をひっくり返した。

その後も、高野が立て続けに得点を奪い、再三ペナルティーエリア外からのロングシュートを放っていた、加藤がゴール前にドリブルで切り込み得点を上げた。終わってみれば5対1の快勝。アジアでは頭一つ抜け出していることを証明する試合となった。

当初、9位になるには10点差が必要だった。

しかし、9月4日に行われた韓国対トルコ戦は、試合中に怪我などで出場選手数が6人まで減ったことから没収試合となり、トルコは10点を奪うものの、規定により韓国0対2トルコにスコアが修正された。これを受けて、9-11順位決定トーナメントで勝ち点4で並ぶ日本は、得失点差で上まわり9位となるはずだっ

9 - 11 位順位決定リーグ

VS 韓国

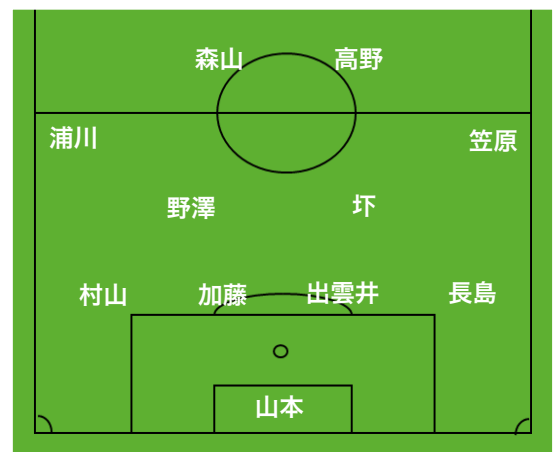
日本 5 - 1 韓国

日本、韓国に快勝

過去最高の9位で全日程終了

南アフリカ共和国、リンポポ州、ポロクワネ
9月6日(月)、15時(日本時間、同日18時)

会場：ピーター・モカバ・スタジアム
(Peter Mokaba Stadium)



【得点者】
37分 Chan-Gyu Park

【得点者】
49分 高野孝一
53分 浦川優樹
73分 高野孝一
78分 高野孝一
81分 加藤隆生

【退場】
45分 森山 15

た。しかし、この試合の裏でトルコも主催側に抗議を行い、改めてトルコの韓国戦のスコアが10対0と修正された。これにより日本代表は、過去最高となるひと

桁順位には届かなかった。

今大会、ふた桁失点の続く韓国を相手に圧勝をしなればならないプレッシャーの中、世界での経験の少ない日本はその実力が問われる一戦となった。フル代表でも苦しむ格下相手の戦いで日本は明らかに経験不足を露呈してしまった。

今大会を通して日本は攻撃時のスペースへの動き出しが課題だった。前線に張り出す選手が多く、自らスペースを作り出す動きやそこに入っていく動きに問題があった。また、全ての試合で先行される展開が続く中で、どうしてもゴールへの意識が冷静さを失わせてしまうのだろうか。このカテゴリーの代表にとって、精神的な成熟というものが必要不可欠でありながら、一番強化が難しい部分でもある。それだけに今後はい

かにに精神的にタフな試合の経験を積むことができるかが課題であることが浮き彫りとなった。

選手は公式戦日程が終わった後も、南アフリカ、ハングリーと親善試合を行う。今大会、日本代表として問題もあったが期待感のある戦いぶりだった。最後までハードにトレーニングを積み、スタツフは少しでも経験を積むことができるよう懸命に働くことが確実なステップアップに繋がるだろう。

また、怪我で欠場中の櫻井選手が、トルコ戦、韓国戦でスタンドから懸命に応援していた姿からは、彼ら自身が代表としての強い自覚を持っていることの現れでもある。

掴んだかみえたひと桁順位を様々な経緯で失うなど、世界大会では何がおこるかかわからない。しかし、今大会の経験全てが「知的障がい者サッカー日本代表」のブラジルへの道が明るいものとなることを改めて期待したい。(取材・文／斎藤紘一)



この日の日本代表はスタンドからの声援を力に次々とゴールへ迫った。(photo : Koichi Saito)



※資料2

【最終結果】

大会はグループリーグを行った後、決勝トーナメントと順位決定リーグに分かれて行われた。
全ての参加国の順位が確定する。

【予選組み合わせ】

グループ	A	B	C
シード国	南アフリカ	サウジアラビア	オランダ
抽選国	1	ポーランド	ハンガリー
	2	韓国	ドイツ
	3	ポルトガル	トルコ

【予選結果】

グループA

日程	対戦カード/結果	会場
8/23 16:00	南アフリカ 2 - 3 ポーランド	ピーター・モカバ・スタジアム
8/26 15:00	韓国 0 - 12 ポルトガル	ンコワ - ンコワ・スタジアム
8/29 11:00	南アフリカ 15 - 0 韓国	セシェゴ・スタジアム
8/29 15:00	ポーランド 3 - 0 ポルトガル	セシェゴ・スタジアム
9/1 15:00	南アフリカ 5 - 1 ポルトガル	オスカー・ムベタ・スタジアム
9/1 15:00	ポーランド 14 - 0 韓国	セシェゴ・スタジアム

	ポーランド	南アフリカ	ポルトガル	韓国	順位	勝ち点	得失点	得点	失点
ポーランド	---	○	○	○	1	9	18	20	2
南アフリカ	x	---	○	○	2	6	18	22	4
ポルトガル	x	x	---	○	3	3	5	13	8
韓国	x	x	x	---	4	0	-41	0	41

ポーランド、南アフリカ、ポルトガルは決勝トーナメント進出。

韓国は順位決定リーグへ。

グループB

日程	対戦カード/結果	会場
8/25 15:00	サウジアラビア 8 - 0 フランス	ギアニ・スタジアム
8/28 15:00	サウジアラビア 4 - 0 日本	ピーター・モカバ・スタジアム
8/31 11:00	フランス 5 - 2 日本	ピーター・モカバ・スタジアム

	サウジアラビア	フランス	日本	順位	勝ち点	得失点	得点	失点
サウジアラビア	---	○	○	1	6	12	12	0
フランス	x	---	○	2	3	-5	5	-10
日本	x	x	---	3	0	-7	2	-9

サウジアラビア、フランスは決勝トーナメント進出。日本は順位決定リーグへ。

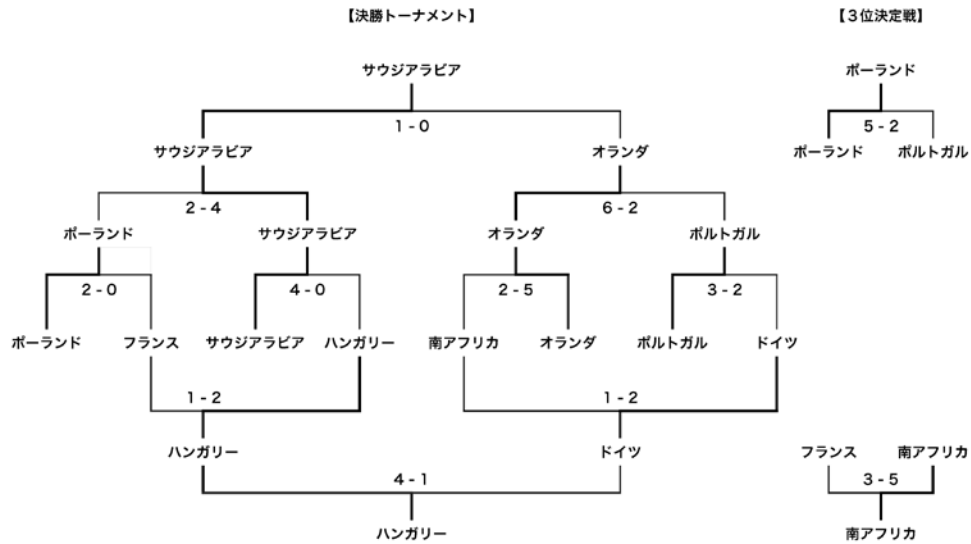
グループC

日程	対戦カード/結果	会場
8/24 11:00	オランダ 4 - 2 ハンガリー	ピーター・モカバ・スタジアム
8/25 11:00	ドイツ 8 - 1 トルコ	ンコワ - ンコワ・スタジアム
8/27 11:00	オランダ 4 - 0 ドイツ	セシェゴ・スタジアム
8/27 15:00	ハンガリー 3 - 2 トルコ	セシェゴ・スタジアム
8/31 15:00	トルコ 0 - 8 オランダ	オスカー・ムベタ・スタジアム
8/31 15:00	ハンガリー 1 - 3 ドイツ	セシェゴ・スタジアム

	オランダ	ドイツ	ハンガリー	トルコ	順位	勝ち点	得失点	得点	失点
オランダ	---	○	○	○	1	9	14	16	2
ドイツ	x	---	○	○	2	6	5	11	6
ハンガリー	x	x	---	○	3	3	-3	6	9
トルコ	x	x	x	---	4	0	-16	3	19

オランダ、ドイツ、ハンガリーは決勝トーナメント進出。

トルコは順位決定リーグへ。



【9-11位決定リーグ】

日程	対戦カード/結果	会場
9/2 15:00	日本 3 - 3 トルコ	ピーター・モカバ・スタジアム
9/4 15:00	韓国 0 - 10 トルコ	セシェゴ・スタジアム
9/6 15:00	韓国 1 - 5 日本	ピーター・モカバ・スタジアム

	トルコ	日本	韓国	順位	勝ち点	得失点	得点	失点
トルコ	---	△	○	1	4	10	13	3
日本	△	---	○	2	4	4	8	4
韓国	x	x	---	3	0	-14	1	15

※韓国 対 トルコ は没収試合。

後半31分、韓国選手の怪我により、プレーヤーが6人以内になったことを受けて、規定により試合が打ち切りとなりました。結果、没収試合となりました。

これを受けて、主催者は規定により、同試合結果をトルコ 10-0 韓国 からへトルコ 2-0 韓国へ変更、日本は韓国戦の試合結果により得失点差でトルコを上回り、9位となりました。現地での結果報告はこれによるものです。

しかし、その後トルコが70分以上経過した試合はその時点で、試合が成立するというFIFAルールの採用を求め、主催側がこれを受け入れ 再度試合結果がトルコ 10-0 韓国 へ変更となり、これを最終の決定としました。

日本は二転三転する裁定に異議を申し入れましたが、受け入れられず、最終結果は10位となりました。

【最終成績】

優勝	サウジアラビア
2位	オランダ
3位	ポーランド
4位	ポルトガル
5位	ハンガリー
6位	ドイツ
7位	南アフリカ
8位	フランス
9位	トルコ
10位	日本
11位	韓国
棄権	ブラジル
	アルゼンチン
	メキシコ
	エジプト
	ナイジェリア



優勝したサウジアラビアイレブン。(photo: Koichi Saito)

知的障がい者サッカー日本代表選手

南アフリカを経験した選手達の想い

加藤隆生（17・MF）

ドイツ大会に引き続き、南アフリカ大会にこれとてもうれしく思っています。

はじめは、南アフリカに行くのはとても不安でしたが、いざ来てみると思っていたより設備や環境もよく毎日がいい状態でサッカーをすることができました。

今回は、自分はフィールドプレーヤーとして練習や試合をしてきました。はじめは練習についていけないかとても心配でした。試合では90分間走りきれるか不安でした。ポジションが変わっても目指すところは一緒なので、自分はそのポジションで精いっぱい頑張ろうと思いました。サウジアラビア戦とフランス戦は負けて悔しいけれど、日本との差は感じられなかったような気がします。思う事は、どれだけ勝ちたいか、点を決めたいかというところが日本と他のチームとの差なのかもしれないと感じました。

特にフランス戦の時は、本当に悔しかったです。社会人になり今改めて感じることは、今まではサッカーと仕事の繰り返しでしたが、大会の間はずっとサッカーができてとても幸せでした。自分はサッカーが好きであるという事を感じさせてくれました。

そして、今まで応援してくださった方や支えてくださった方々に感謝の気持ちを忘れません。本当にありがとうございます。監督やコーチやスタッフのみなさんからは、戦う気持ちや辛い時に背中からそつと声をたくさんかけてもらいました。

本当に長いようで短かった1ヶ月間、とても充実した日々でした。ありがとうございます。



堀内拓哉選手



加藤隆生選手

堀内拓哉（2・DF）

大会での自分のプレーは、ボールに行ききれなくて練習試合でも失点をしてしまい、ヘディングでも後ろにそらせてしまった失点をしてしまったことがダメでした。

外国人の印象は、サウジアラビアの選手は足も速くてボールのスピードも速くて正確なパス回しが印象に残っています。フランスの選手は、裏のスペースに送るのが何回もあり、ボールスピードも足の速さも印象に残りました。トルコの選手も同じです。大会で印象に残った事は、やっぱり外国の選手は体も強いし体力も高さもあると思いました。試合が始まると、観客席からすごい応援が聞こえてきてびっくりしました。

宿舍での生活は、2人部屋で気楽で話も盛り上がり、他の部屋へも行き他の県の人も話をしました。楽しかった事は、一緒に生活ができたことです。

これからの自分の目標は、体力をあげること、1対1で負けず最後まであきらめなくなるになることです。

櫻井嵩比都（3・DF）

強化合宿では、どれもキツイトレーニングだったから、凄く練習について行くのが大変だったのですが、合宿をして凄く自分の足らない部分に分かる事が出来たりする所にもなったので良い場所だと自分は思いました。

この大会で凄く準備で困った事があります…それはお金です。負担金が始めは30〜40万いると協会から言われていたので、行くのにお金を貯めるのが凄く困りました。ですが、周りの方々が協会に募金をして下さったお陰で自分たちの負担が凄く少なくなっていく事が出来たので感謝をしています。特

に一番間近に自分達の為に募金活動をして下さった人は自分の親だったので感謝をしています。

自主練では体力を付ける為に走ったり1人でも出来るパスやリフティングとかをやったりして来ました。

大会での自分のプレーは良いとは言えませんが、何故かと言うと、肩を怪我してしまったのも有りませし、やはり自分はボールばかり追ってしまうので周りが分からなくなってしまうDFラインが片方によってしまつて中にボールを入れられてからの対応が出来ていなかったりして失点に繋がってしまったので自分のプレーは良いとは言えませんが一試合一試合自分の出来るプレーは頑張つたと思います。外国選手はやはり1人1人のテクニックも有るしフィジカル面もかなり有るなと思います。

このチームは凄く良いチームだとおもいます。大会で印象に残っているのはトルコ戦です。なぜかと言うと、負けていたけど同点までにして結果引き分けに出来たのは凄いなと思いました。なぜ引き分けに出来たかと言うと、最後まで皆が諦めなかつたから引き分けに出来たんだと自分は思いました。

宿舍の生活は思つて居た以上に生活しやすかったです。この大会で楽しいと思つたのはやはり上手い人とサッカーが出来たのは楽しかったです。

つらかったのはやはり試合で肩を怪我してしまつてその後の試合に出れなかつた事です。自分はこの大会で終わりたいくないので、自分は4年後のブラジル大会に向けてまた一から体を作つてまた代表に選ばれるように頑張りたいです。



出雲井恭兵選手



櫻井嵩比都選手

出雲井恭兵(4・DF)

前回のドイツ大会では開幕戦で怪我をしてしまい悔しさが残つた大会だっただけに、全力で全試合を頑張りたいという思いでプレーしようと思ひました。

初戦はエジプト戦でしたが、エジプトが大会に参加しなくなったのでサウジアラビアが初戦となりました。それを聞いた時は、サウジアラビアは前回大会で優勝しているそのチームと戦うということで緊張しました。ミスが重なり0対4で負けてしまいました。サウジアラビアは個人の技術が高いと思いました。

次の対戦相手のフランスは、サウジアラビアに0対8で負けているので引き分け以下ではグループリーグ敗退になってしまうので、絶対に負けるわけには行きませんでした。しかし負けてしまいました。同点まで行きましたが、自分のミスで失点してしまい2対5で負けてしまいました。自分のミスで失点したので、次のトルコ戦は、正直戦う自信がなく不安の中トルコ戦が始まりました。立ちあがり1分で失点してしまい、そこからまた2点取られました。1点差となったロスタイムでのセットプレーで、今までのミスを挽回するしかないと思ひ相手のゴールキーパーに突っ込んでいったらボールがゴールに入っていました。とてもうれしかったです。結果は3対3の引き分けでしたので悔しいし、失点がなければ勝つたと思ひました。最後の韓国戦は、同じアジアの国なので絶対に負けたくない気持ちで挑みました。前半に点が取れなくて先制点を取りましたが、相手は後半動けなくなり結果は5対1で勝ちました。

全試合を振り返ってみると、全試合失点してしまいました。自分の任されているセンターバックは大事な場所だと思ひました。

宮原優樹（5・DF）

今回で3度目の大会の出場で、今回は選ばれないと思つたので選ばれた時はとてもうれしかったです。

南アフリカへ来るまでは、治安や環境面、資金面など不安がありました。監督やコーチ、スタッフ、事務局、応援してくれた皆さんの方々のおかげで無事に来ることができました。宿舎はとても過ごしやすく、食事もおいしく陽気で親切なロツジの人たちと楽しく生活することができました。

一番印象に残つた試合は、日本対トルコ戦です。3点取られながら3点を奪い返し引き分けに持ち込んだことが思ひ出深いです。特にロスタイムに入ってから、フリーキックを押しこんだ時はとてもうれしかったです。

初めて代表に入つて10年が経ちました。日本代表チームにはたくさんの事を教えてもらいました。今まで一緒に戦つたチームメイト、スタッフに感謝しています。

私個人としては、今大会は公式戦には出場できなかったのが悔しい大会となりました。大会が終わり、日本へ帰つてもこの悔しさをバネに練習に頑張りたいと思います。

村山翔太（6・DF）

まずは強化合宿の感想ですが、練習がとてもハードで大変でした。でもその練習の結果、自分自身がうまくなりとてもよい強化合宿になり、苦手なところとかがよく分かりました。

外国人選手とチームの印象は、ひとりひとりがスピード、テクニックがひとまわりもふたまわりも上だったし、全然かなわなかったです。

大会で印象に残つた事は、あんまり外国チームの試合は見て



村山翔太選手



宮原優樹選手

いなかったのが開幕試合を見られたことはよかつたし、監督やコーチが言っていた外国人選手の激しいプレーを自分たちが戦う前に見られてよかつたです。大会での自分のプレーは、最悪でした。なぜなら、自分のミスや自分のサイドでのピンチが多く失点につながることも多かつたからです。もつと自分自身がうまくなつていけば、チームに迷惑をかけずに上の順位になっていたと思います。

これからの目標は、うまくなり世界の差が縮まる事が出来るように自分のチームに戻り練習し、もう一度代表に選ばれたいです。

邊田光夫（7・MF）

強化合宿では、特に夏の暑い中での練習が大変でした。

今大会は、年齢も30歳ということとで体力や技術ともに若い選手にはついていけません。事前の韓国遠征に行けると思っていました。急にメンバーには入つていないと言われませんでした。色々準備したのにすぐシヨックでした。

自主練習では、1試合でも多く出られるように自分の課題や筋力アップを心掛けました。仕事もしているので、疲れてサポートの日もありました。自分自身の甘さが出て、これくらいいいだろうという思いでした。自分自身のプレーでは、1対1が弱かつたり、すぐにあきらめてしまいました。

でも、試合に出れば、ゲームの流れを読んだり相手との駆け引きは誰よりも負けてないと思います。外国人選手は体も大きくパワーもあつて、さらに個人の技術が高いので日本人が弱く感じます。でも、同じ人間なので負けるわけにはいきません。日本も最強のチームを作つて優勝をしてほしいです。

この大会は、サッカー選手としてはみんなが目標にしている

大きな舞台です。3大会に出場し、選ばれたこともすごくうれしく思っています。

宿舎での生活では、今回は最年長でもあり今まで経験したことを生かしながら、後輩に教えたり見本になった事も自分では少してきたのではないかと思います。でも気付かない部分や教えられなかった部分も多くあります。あまり言い過ぎてもないだこの人とは思われ楽しい宿舎生活も楽しくなくなると思いますが。体力、肉体的、精神的にも辛い部分はありました。でもよい経験になったし、これからもこの大会が続く限りは出場して欲しいです。

これからの目標は、指導者の資格を取り自分が経験したことを教えていきたいと思っています。自分自身がサッカーを続けていけば、また日本代表として世界選手権に出場したいです。



邊田光夫選手



浦川優樹選手



坪一二三選手

坪一二三（8・MF）

大会を終えて、まず自分のミスで失点されて負けたことが一番悔しかった。外国人とやって思ったことは、スピードやボールのキープ力などの個人技術がすごく、自分のプレーは全然歯が立たなかった。この3週間で、自分は成長できたと思います。きつい練習だったけどパスの精度やヘディングの精度が上がりました。ポジションニングも前よりは良くなったような気がします。

この大会でお世話になった人やINVASーFIDサッカー世界選手権南アメリカ大会関係者の支えがあつて自分たちがサッカーをできるという事を忘れてはいけないと思います。本当にありがとうございました。

浦川優樹（9・MF）

今回の世界選手権大会での自分自身のプレーは、ドリブル全てが全力のスピードをしていたので体力が続かず相手にボールを奪われてしまったり、いい加減なパスをしてピンチを招いてしまったり、ボールへのアプローチが遅くて中央にドリブルされてしまう事が多かったように思います。

これからの課題は、いい加減でなく正確なパスを出すことやドリブルで仕掛けてためであればやり直す。ボールコントロールミスの処理を早くすることと心掛けて頑張りたいと思います。

4年後の世界選手権にまた呼ばれるように、日々のトレーニングや試合でシュートを決められる選手になれるようしっかり練習をしていきたいと思っています。

自分自身、今大会は2回目ということもあり緊張よりワクワク感が大きかったです。

ドイツ大会では、外国人選手のすごさに圧倒されて自分のプレーができなく後悔が残る大会でした。でも、この経験が自分にとって大きかったと今では思います。4年間、ドイツで経験したことを忘れることなく日々の練習に取り組んできました。

南アフリカ大会での初戦は前回大会優勝のサウジアラビアで、日本より格上ということもあり守備的なシステムで試合に臨み、0対4で負けてしまいました。でも、リトリートした守備からのカウンターがいくつか出来、狙い通りの試合運びができたと思いますが、数少ないチャンスを決め切れないのが痛かったと感じました。2戦目はフランスで、引き分けでもベスト8に進めるアドバンテージがあつたにもかかわらず、2対5で負けてしまいました。相手はロングボールやセットプレーからチャンスを作り、日本は簡単に失点してしまいました。

サウジアラビアみたいに細かくつないで攻めてくるチームと比べると、フランスやトルコなどパワープレーをしてくるチームとやる時に圧倒的に弱いと思えました。ゴール前の競り合いに負けたり、クリアボールを拾われてのミドルシュートだったり、ディフェンスラインの裏にボールを蹴られて走り負けたり、いくつものミスが出て簡単に失点してしまう。失点しても得点できればいいけど、それができないのが今の日本の課題だと思います。フランス戦は特に、絶対に勝ちたかったけれど負けてしまいとても悔しかったです。

これからの長い4年間、自分に出来ることを一つ一つやっていき、がんばっていききたいです。



野澤雄太選手



坂野達也選手

強化合宿の感想は、初めてのことで分らないことや不安もありましたが、そんな時に周りの選手やスタッフの方がサポートしてくださったおかげで少しずつ分かるようになっていくのが嬉しかったです。練習は厳しく、最初はみんなについていくのがきつくてついていけませんでしたが、まわりの選手がサポートしてくれてみんなについていくことができました。練習では、監督やコーチに怒られましたでしたが自分にとってはいいい経験となつて少しはサッカーもうまくなりましたが、態度が悪くて怒られたことなどに素直に聞けなかった事は反省したいと思います。南アフリカに着いた時は緊張と不安もありましたが、大会が始まるとさらに緊張と不安が大きくなりました。

試合に出られるのかと考えていましたが、練習がうまいことなく一試合目のサウジアラビア戦は試合に出られなくてすごく悔しく、次の試合は出てやるという気持ちでいましたが練習もうまくなかったし、コーチに文句を言い怒らせてしまった。2戦目のフランス戦も出られませんでした。練習は毎日ありましたが、練習の時に余計なところでボールを蹴ってチームの邪魔をして何回も怒られました。反省して練習を頑張ったつもりです。

順位決定戦では、トルコ戦に後半から出場しましたが緊張してパスミスが多く相手に簡単にボールを奪われてしまったのもかわらずそのあとボールを取りに行けず、相手に走り負けしてしまいました。なので試合から帰ってきたらひたすら走り続けました。韓国戦は試合に出られませんでした。試合に出られなかった事がすごく悔しく練習を一生懸命にやって次の試合に出られるように頑張りましたが、文句が多くて練習がうまくできませんでした。コーチには本当に迷惑や怒らせてしまい悪かったし、もうこんな事がないように文句を言わないで素直に

聞ける人になりたいと思います。

日本代表になれたことは、親や会社の人、そして近所の人、まわりの人に感謝の気持ちでいつぱいです。これからは地元に戻って今までやってきたことを忘れずに毎日のランニングや筋トレをしてもっとうまくなれるように練習を頑張つて、地元の人たちにもサッカーを教えてやってまた4年後に地元から1人でも多く日本代表に選ばれるように一緒に練習を頑張りたいと思います。

山本匠伍(12・GK)

大会に向かう成田合宿から考えると、監督やコーチ、トレーナーの人に色々支えられてもらったおかげで自分なりに前よりは少し力がついたと感じています。でも、まだまだ力が足りないということはこの大会で感じました。

初戦のサウジアラビア戦では、1点目の失点で世界のレベルのすごさを初めて痛感させられました。そこから自分には自信がなくなりました。フランス戦では5失点してしまいました。課題が多い試合でした。トルコ戦では、絶対に失点をしないと思っていました。しかし、その思いも足りず3失点しました。

自分がこの大会で本当に日本を代表してゴールを守っているのかすごく考えさせられる試合でした。でも、自分がやるしかないと思うもう一度心を入れ替えて挑んだ韓国戦では、1失点したものの初めての勝ちだったのでとてもうれしく思いました。でも、失点したことはすごく悔しかったです。この大会で、自分の悪いところやいけない事などがわかりました。監督やコーチに言われたことを、素直に聞けるようになり自分の実力や日々の生活の場面で役立てていけるようにしたいと思います。



熊崎将大選手



山本匠伍選手

4年後は、もっともつと自分の実力をあげて、加藤選手や野澤選手のように生活でもプレーでもしっかりとできるような選手になり、ブラジル大会に選ばれるように頑張りたいと思います。

熊崎将大(13・FW)

僕は、成田合宿で食事の事でコーチ達からもっと早く食べるようにしろと言われて、不安のまま南アフリカについてしまい、初めのうちは食べる時間が少なかったのですが、日がたつにつれて食べられるようになったし、スピードも速くなったのでよかったです。

大会では、自分は1試合も出ることができませんでした。ベンチで見ている、外国の選手はパスの質やトップスピードのプレーができており、自分には足りないところだと感じたので、練習して出来るようになりたいと思います。

宿舎では、東海地区の選手だけでなく他の都県の選手と話げできたし、分からない事は経験者に聞くなどして充実した生活を送れたと思います。つらかったことは、毎日の40分間のランニングです。初日のトレーニングで、自分の体力のなさを実感して自主的に走ればよかったです。コーチに言われてから始めた時は、遅いペースでしか走れませんでした。毎日走ることのでんだんペースが上がっていったし、体力もついてきたと思うのでランニングは岐阜へ帰つても続けていきたいです。

これからの目標は、トレーニングマッチで監督からさんざん言われた動き出しの遅さやパスの質をもっと高めて、体力も今よりも付けて、まずは岐阜国体で県選抜を最低3位には入れるようにしたいし、個人としてもブラジル大会で選ばれるように練習していきたいと思います。

笠原健 (14・MF)

僕は、この日本代表になれてすごく幸せでした。正直言うと、練習はものすごく辛かったです。でもあの練習を乗り越えられたという自信、サッカーを通して負けたくないという強い気持ちを持てたのは初めてでした。

でも今回のワールドカップでは、自分の持ち味のドリブルが全く通用しませんでした。それは本当に悔しかったです。大会では、サウジアラビアに0対4、フランスに2対5の2連敗で予選敗退、試合終了のホイッスルが鳴った時、涙が止まりませんでした。僕たちのために色々な人が支えてくれていたのに、結果を残すことができなかった事が一番悔しかったです。成田合宿やその前の強化合宿では、監督、コーチは厳しくなおかつ優しく一生懸命僕たちを指導してくれました。その恩返し为目标の予選突破でしたが、それがかなえられなかった事も悔しかったです。

この日本代表に選ばれてからの道のりは、ものすごく大変でした。でもこの日の丸を背負って戦えたこと、南アフリカという大地でチームの仲間と夢を目指して頑張れたこと、僕の一生忘れられない人生です。僕はまだ4年後のブラジルのことは考えていません。それはコーチにも言われたけど、僕はずっと人に甘えていたと思います。もともと大人になって自分のことは自分でできる大人をまず目指したいです。そしてこの南アフリカ大会で悔しかった気持ちを忘れないで、帰った後もしっかりと自分の課題と向き合って一步一步進んでいきたいと思っています。その一步一步が4年後のブラジル大会につながっていると思います。

南アフリカ大会、悔しい気持ちで終わってしまったけど色々な経験ができてよかったです。



森山憂多選手



笠原健選手

森山憂多 (15・FW)

大会での自分のプレーは、フォワードとして役目を果たせませんでした。サウジアラビア戦では、シュートは打てましたが点にはなりません。0対4で負けてしまいました。フランス戦では、決定的なチャンスを6回決められなくて2対5で負けてしまいました。フォワードとして失格だなあと感じました。

トルコ戦では、得点を決められられなかったです。高野選手が2得点し、3対3の同点になりましたが、引き分けで終わり自分では4回のチャンスをはずし、パスを出さずに自分一人で行こうとしてはずしくりました。韓国戦では、前半にファールをしてしまい退場になってしまいました。ものすごく悔しかったです。

これからの自分の目標は、4年後は4年前の自分より数段うまいフォワードとなり、日本代表としていい成績を残したいです。さらに、野澤選手みたいにうまくなりたいです。うれしかったことは、90分フル出場できたことです。つらかったことは、90分フル出場しましたが走り回ったので辛かったです。自分にはスタミナがないのでこの大会が終わっても自主練習をして、スタミナとフィジカルをあげて4年後に向けて頑張りたいと思います。

高野孝一（16・FW）

大会での自分自身のプレーでは、南アフリカに来る2週間前に右足首を捻挫してしまい、直前合宿でも足が痛くて途中からみんなと一緒にプレーができなくて、別メニューをしました。直前合宿が終わっても、足の状態が悪くてなかなか良い状態で南アフリカに入らず、最初の練習からサウジアラビア戦までみんなと一緒に練習したり別メニューをしたりを繰り返して、自分がこの大会に何しに来たのかが分からなくなりました。

しかし、できる限りのことをして試合に臨みました。サウジアラビア戦は、後半からの出場でした。自分の力を発揮することができずに0対4で負けてしまいました。フランス戦はスタメンで出場しなかったため、練習をがんばりました。しかし2対5で負け予選リーグ敗退となり、すごく悔しかったです。でも、まだ順位決定戦があつてトルコと韓国と戦い、トルコとは3対3で引き分けでしたが自分は2得点することができました。

韓国戦では、トルコ戦と違い自分のプレーができましたが、決定的な所でシュートを外し前半は0対1で終わりました。後半は自分に良い状態でパスが来たので3点決めることができました。しかしまだ得点できたと思うので、4年後の大会には出られるか分からないけど、もっと練習して少しでもよくなつてチームに迷惑をかけないように頑張ろうと今回の大会で思いました。



草信政裕選手



高野孝一選手

草信政裕（18・GK）

初めて日本代表として強化合宿に参加させていただきましたが、とてもきつい練習をして難しかったけれど自分なりに追い付こうとして頑張つて練習をしました。

大会では、緊張し自分自身のプレーはあまり出せませんでした。しかし自分では良いパフォーマンスを見せられたかなとも思いますし、一方ではもうちょっと頑張れたかなとも思います。世界のレベルの高さを知りました。日本代表選手である誇りや責任感、自分を支えてくれた園の先生や学校の先生、所属チームの人たちのおかげでここまで来ることができました。試合には全く出場することができませんでしたが、ベンチではいつばい声を出しました。決勝トーナメントには行けませんが、ものすごくいい大会だったと感じています。

2014年のブラジル大会に向けて、しっかりと準備して積極的なパフォーマンスを見せたいと思います。学校に戻ったら、みんなと一緒に仲間を信じて練習に励みたいと思います。この大会に参加できたことは、本当によかったと思います。素晴らしいピッチといいホテルでした。約1か月はとても長い時間でしたが、仲間を信じ過ごすことができました。本当によかったです。

自分としては2回目の世界選手権大会で、前は攻守でチームに貢献できなく試合に出られなく悔しい想いをしました。南アフリカ大会では、ディフェンスとして全試合に出場することができたことはすごく嬉しかったです。目標であるベスト4にいけないとすごく悔しかったです。自分のプレーは、1対1の対応は粘り強くできてよかったですけど、ポジショニングが悪くてアプローチが遅くフリーな状態で前を向かせてしまっていたことが悪かったところです。

宿舍生活では、一緒に部屋の人と協力し合って洗濯したり、チームのみんなとコミュニケーションできてよかったと思います。今大会で、90分間走る体力がなくて、ゲーム中にディフェンスのラインを揃えなければいけないところを1人残ってしまったりオフサイドをとれなかったりしたので、これからは毎日走って90分間走れる体力をつけたいと思います。



浅津友伸選手



長島幸佑選手

外国人選手とチームの印象は、想像していたよりも体も大きくがっしりしていてビックリしました。プレーもうまいスピードもあるし日本人選手よりも数倍もすごいので、スタメンの選手でもなかなか勝てずに僕が出て何の役にも立たないくらいすごいと思いました。

日本チームは、時々言い争いやケンカもあり印象ははつきり言っつてよくないと思います。試合中は言い争いもあるけどまともについてスタンドで見ているといいチームだと思いました。僕はサブ組でもいいので、その中に入りたいと思いました。

印象に残った事は、サウジアラビアとの試合で、自分が思っていたよりも強いという印象ははるかに下で、そこまで日本との差はほとんどないと思います。日本はどうやったらサウジアラビアに勝てるのかは、まずひとりひとりの技術とスピードと体力と絶対に勝つという気持ちが必要だと思います。自分にはまだ、技術やスピードや体力はスタメン組にはとうていおおよばないけど、チームの心、魂が丸となればどこの国にも勝てると思います。

これからの自分の目標は、まず全国大会で東京を倒して島根県が全国一になることです。島根県へ帰ったら東京都の人たちに負けないくらい練習をして、今度こそ東京を倒して全国一になって東京都の人たちに島根県は強くなったなと思ってもらえるようになりたいです。もし4年後また日本代表に呼ばれるようなことがあれば、恥じないプレーをしてみんなを見返してやりたいです。

五十嵐 滉太 (21・MF)

今回の日本代表で学んだことは、チームワークです。やっぱりチームワークは大切だと思います。理由は、誰かひとりでもチームのために何かしなかったりしているとサッカーに影響するし、チームにもかなり影響するという事がこの大会でよく分かりました。

大会の準備で困った事は、南アフリカは寒いと聞いていたので防寒着は必要か、日本のご飯は必要なのかわからなかったのが困りました。でも、意外と暖かいし、ご飯もおかずばかりでランチボックスも毎日同じだけど、なんとかやっつけていけると思ってた安心しました。

大会の自分自身のプレーは、自分は体力もないし体を入れるところも入れないし、レギュラー組と同じサッカーができなくて悔しかったです。自分の努力が足りなかったです。東京に帰ったらこの大会を忘れることなく、毎日走ってテクニックよりも体力をつけたいと思います。

つらかったことは、試合に出られなかったのと、自分自身にあまりにも弱かったところです。これからの目標は、体力をつけたいと思います。また、雑誌とか本を見て研究してうまくなり、走ったり筋トレをしたりダッシュしたり、何度も走りとにかく体力をつけます。



五十嵐滉太選手



トルコ戦では必死に応援するスタッフに合わせて現地の人々も「ニッポンコール」を大熱唱。試合間際のゴールに酔いしれた。

南アフリカでの生活、練習、試合から もうひとつのエピソード

写真：斎藤統一



日本チームはフェアプレー賞を受賞。



試合前のロッカールーム。日の丸やメッセージ入りのユニフォームが見守る。



練習場にはいつも子供が集まり、球拾いを手伝ってくれた。無邪気な笑顔に誰もが和む瞬間だった。



ほぼ毎日通った大学のグラウンドでは間近で練習を見守る姿も。



厳しい試合日程に、ハードな練習。トレーナー室はいつも満杯だった。



毎日声をかけてくれた気さくなホテルのスタッフたち。



現地の人々は仕事場へ何時間も歩く。

知的障がい者サッカーを見つめ続ける
静岡県サッカー協会ハンディキャップ委員会副会長／
日本知的障がい者サッカー連盟顧問

瀬戸脇正勝さんからのメッセージ

「夢をありがとう！そしてこれからも」

第5回知的障がい者サッカー世界選手権南アフリカ大会から、無事帰国、お疲れ様でした。慣れない国での生活、戦いは、6月のワールドカップのたくさんの放送から想像できますし、「もうひとつのワールドカップ」では、スタッフ、選手とも、自分の仕事を調整しながらの参加と思いますので、準備、モチベーションの維持等大変だったと思います。本当にお疲れ様でした。そして、ありがとうございました。

「もうひとつのワールドカップ」と呼ばれるこの大会も日本が参加して3回目になります。日本では、まだまだ知名度が低いのかも知れませんが、継続して参加できていることに敬意を表します。この大会は、日本で、サッカーに熱中している選手達にとって、憧れであり、目標であります。サッカーをするようになって、Jリーグに興味を持つようになり、日本代表を応援し、果てには、諸外国のサッカーも応援する選手も出てきているようです。彼らは、興味関心の幅が狭い、行動力に乏しいなどと言われることがありますが、「そんなことはない」とはっきり断言できます。目標を持つこと、それに向かつて努力できること、好きなことに打ち込めることなど環境を整えることができることがたくさんあります。

サッカーをするために出掛けるということは、「日

程がわかる」、「準備ができる」、「公共の乗り物が使える」、「コミュニケーションができる」、「身支度を短時間でする」、「話を聞く」、「ルールがわかり、守る」……などなど、数え上げてもきりがなく、彼らを育てます。まさに、生活を切り開いていくためのスキルを伸ばし、生活にはりを与えているのだと思います。そういつた彼らを応援している連盟には、これからも、夢を持てる環境作り、そしてもうひとつ、サッカーを愛する仲間を増やすことに邁進することを期待します。

「地方もがんばります」

私たちの地域は、知的障がい者のサッカーが盛んです。多くの方がサッカーを楽しんでいるだけでなく、支援者がいっぱいいます。指導者や選手から、たくさんの要望が出て、県内にたくさんの大会ができました。それぞれの大会に特色があり、皆が楽しめるように多くの工夫がされてきています。カテゴリー別や年齢別などもそのひとつです。最近では、県全体でなく、東部、中部と地域毎の小大会が増えていく傾向にあります。

今年度、ある地域に特別支援学級の生徒を参加させることを目的とした大会ができました。これは、特別支援学級単位では、大会に参加できるだけの人数にならないので、サッカー教室を作り、その教室の参加者でサッカー大会に臨むものです。

この新大会のコンセプトは、なるべく初心者が参加すること、運営に多くの健常の中学生が関わることをあげています。もちろんスタッフ、ボランティア、協力団体も楽しむことが原則であることはいうまでもありません。

「中学生スタッフの感想」

ぼくは、10月3日に障がい者サッカー大会のボランティアに参加しました。今まで、障がい者の方のボランティアを行ったことがなく、初めてやることになりました。ぼくは、清水スポーツを楽しむ会のボランティアになりました。

開会式が始まり少し楽しい気分になったところで、一番最初の試合が始まりました。静岡市サッカースクールはとても強いチームだけど、一人一人とてもがんばりました。そして、1点目を先制しました。前半を終わったときは、みんながんばったのでとても疲れていました。

2試合とも負けてしまったけれど、ボランティアの3人ともチームの一員になれたと思います。

障がい者の方々は、とてもやさしく楽しく接してくれました。たとえ障がいがあっても、普通と同じ。これからもっと接していきたいです。

「サッカーの公式試合に初めて出た選手の感想」

初めてのディフェンスの右サイドをやりましたがむずかしかったです。一試合目で失点してしまい、くやしかったです。二試合目からは無失点でおさえられたことがよかったです。決勝戦では相手のフォワードの選手とせり合うことができ、ディフェンダーとしてはとてもよくできました。

清水エスパルスの市川選手みたいなプレイをしたいです。兵働昭弘選手のように守備や攻撃などうまくできるようになりたいです。

サッカーできて幸せです。これからもがんばります。このように、「大会に関わるすべての人がこの大会をとおして、楽しいを感じて！」と発信しています。現在この大会のスタッフ、始めて参加した選手の感想を読んでもいただくように、多くの仕掛けをしているところです。

「これからもよろしく！」

地域の活性化、支援者の輪を広げること、日本代表の強化、PR等、日本知的障がい者サッカー連盟には、課せられた多くの仕事があると存じます。故 長沼健氏が、「一生懸命に取り組む彼らのサッカーが大好きである」と言われ、我々関係者を「胸を張って頑張ってください」と励ましていただいたことを思い出します。

長く大会や連盟に携わる間には、「どうしてやらない」、「なぜ動いてくれない」、「誰もわかってくれない」、「そんなく」などという思いがわいてくることがあります。そんなときにいつも長沼氏のこの言葉を思い出します。

また、長沼氏が、もうひとつのワールドカップドイツ大会に行ったときに、デットマール・クラマー氏から、激励とアドバイスの電話が入ったと楽しそうに話をしてくれたことがありました。人との絆を深めてくれるのもサッカーです。

私も、これまで出会った仲間感謝し、これからの出会いを楽しみにしたいと思います。これからもよろしく願います。



サッカーは日本各地で、世界各地で行われ、誰もが楽しめることを南アフリカでも実感した。(photo : Koichi Saito)

知的障がい者サッカーイレブンを追いつける
フォトジャーナリスト

鈴木幸一郎さんからのメッセージ

6月の韓国・濟州島。大雨の中で行われた知的障がい者サッカー日韓交流大会、日本代表対韓国代表の試合は6対2で日本が快勝した。4月に発足して以来初めてと言える、内容が伴った勝利であった。

僕は悔しかった。彼らが成長しているのに自分の写真は全然成長していない。そこで初めて自分が彼らの写真を撮っているモチベーションに気づいた。一緒に成長できるチーム。それが、僕が彼らを応援する理由だ。

去年の夏に初めて知的障がい者サッカーに出会って、写真を撮ってきた。紹介で見せてもらった知的障がい者サッカー東京選抜のチーム。地域ごとに選抜チームがあり、国体や全国大会などの活動が行われているという事を初めて知った。そこには自分の知らないサッカーがあり、もつと知りたいたいと思って写真を撮り始めた。

ちなみにこの東京選抜、他のチームに比べて抜きん出て強い。今年の2月に岐阜で行われた日本一を決めるチャンピオンシップでは、決勝でも5対11で快勝した。にも関わらず、ある選手はこう言った。「全然嬉しくない。」なぜならこの日、東京の監督、柳澤繁氏からの要求は「6対0で勝利」だった。「障がいサッカー」とあなどるなかれ。彼らのサッカーは、れっきとした「サッカー」なのだ。更に上を目指す姿勢が、彼らの魅力だ。

さて、4月から本格始動した知的障がい者サッカー日本代表。8月から9月の世界大会、「INASEPID 知的障がい者サッカー世界選手権南アフリカ大会」に向けてチームが発足した。北は秋田から南は長崎まで、バックアップ選手を含む21人の選手が招集された。

しかしなかなか歯車が合わなかった。監督の小澤通晴氏をはじめスタッフが力を入れて指導した事は、チームとしての守備と攻撃。特に発足当初は守備に重点をおいてトレーニングを行ったが、なかなか結果に結びつかない。一人で突破を仕掛ける、一人でディフェンスをする。ついさつきまで連携の練習をしていたのに、何故試合でできないんだ。毎回合宿の最後に行われるトレーニングマッチを見るたびに、僕はやきもきした。彼らは社会人、あるいは学生なので、集まれるのは月に多くても2度。短い時間でチームを作らなくてはならなかった。前途洋々とは言えなかった。

チーム発足から2ヶ月で迎えたのが、くだんの日韓交流戦。それまで試合で生かされていなかったチームでの守備が機能し、驚くべきボール支配率で韓国を圧倒した。お互いに指示を出し合い、連携してボールを奪いに行く方法がようやく形になってきた。監督もスタッフも選手も、手応えをつかんだのだった。

後日、撮った写真を見て僕は悔しくて震えた。彼らを撮り始めてからというもの、自分の写真がほとんど変わっていない。あんなに噛み合わなかった知的障がい者サッカー日本代表が、一気に変わったというのに。彼らに負けてられない、それが彼らを撮る新たなモチベーションになった。

知的障がい者サッカー日本代表の南アフリカでの活躍を、僕は見る事ができなかった。でも、これからも

応援したいと思う。なぜなら共に向上心をもってつきあえる、彼らはそんな身近な「日本代表」だから。4年後のブラジル大会に向けて、彼らとともに成長しながら、応援していこうと思う。それが、僕の応援の形だ。



茨城県神栖市波崎での強化合宿。(photo : Koichiro Suzuki)



茨城県波崎町での強化合宿。(photo : Koichiro Suzuki)



雨の中韓国で行われた日韓戦。(photo : Koichiro Suzuki)

※資料3 【現地での生活】

○宿舎

南アフリカには20時間のフライト後、8月21日（土）朝7時にヨハネスブルグに到着。4時間ほどバスに乗り、宿舎に到着。昼から軽いトレーニングをおこない28日のサウジアラビア戦に備えた。宿舎となったオアシスロッジはポロクワネ市内から少し離れたリゾート施設であった。周囲2kmほどある敷地は高い壁と高圧線で仕切られており、正門にはガードマン、敷地内は警察官が常駐しているセキュリティーレベルは高い宿泊施設であった。敷地内のグラウンドは広さは十分にあったが、荒地地で本格的なトレーニングは難しかった。

ホテルのスタッフはみな気さくで、フレンドリー。サブ組はホテルのスタッフサッカーチームと2回トレーニングマッチを行ない、昼食はチーム全員でホテルスタッフとバーベキューを行うなど積極的な交流が図られた。

ポロクワネ市内のシティホテルのチームは外出もなかなかできずにいた環境に比べると非常に快適であった。

○現地での生活及び選手の変化

現地は日本の10月頃の気候で、日中は28℃くらいだが、朝晩は息が白く見えることもあった。一日の温度差がある中、体調を崩す選手はほとんど出ず、しっかり自己管理ができていた。

現地での一日は6:30の散歩に始まり、AMに1時間のサブ組トレーニング・PMは全員で2時間のトレーニングもしくは試合、夕食後19:30よりミーティング、21:00からスタッフミーティング、スタッフは翌日の準備で終わった。

部屋は2人部屋で快適な部屋であった。各地域FIDトレセン（1泊2日）や国内合宿の成果もあり、日常生活での問題や時間等で注意、指導を受ける選手は少なかった。部屋替えも2回行い、いろいろな選手がコミュニケーションをとれるようにした。サブ組とレギュラー組の壁もなく、チームとしてまとまりがあり、雰囲気も良い仲間たちだった。

トレーニング終了後は宿舎の敷地内から出ることができないので、毎日40分のランニングを行うものや手洗いの洗濯をするもの、ほかの部屋で持参したDVDを見る者など各自時間を有効に使っていた。日本では自分で洗濯することがあまりない選手たちが毎日こまめに手洗いで洗濯する環境も自立していくためには必要だと感じた。

ドイツ大会のように選手たちが街中を散策することができなかつたので、地元の人たちとの触れ合いは少なかったが、ホテルスタッフや常に帯同してくれたポリスとは日本語を教えてあげたりしながら親密になっていった。



南国のリゾートといった趣のオアシスロッジ。(photo: Koichi Saito)



広大なホテルの敷地は堅い草に覆われた過酷な環境。(photo : Koichi Saito)



朝のトレーニング時は選手が自分の言葉で意気込みを語った。(photo : Koichi Saito)



ホテル主催でバーベキューが行われ、交流を図った。(photo : Koichi Saito)



編集後記

今回、この報告書を編集するにあたって
私たち障がい者スポーツに関わる者は
本当に多くの方々に支えられていることを改めて思う。
多くの大人の支えがあるから、彼らが居るのだろう。

障がい者スポーツは実に不安定だ
「管轄が違う」「対応出来ない」
数限りなく聞いてきた
大人から。

手を差し伸べて積極的に応援してくれる大人
そっぽを向いて知らん顔の大人
どちらも大人だ。

でも大人も子供の頃は「夢」を持っていた
野球選手になりたい！ 宇宙へ行くんだ！
みんな夢をみていた。

障がい者も同じ
サッカーをやりたい！
世界にチャレンジしてみたい！

多くの支えのお陰で
南アフリカでは
知的障がい者サッカーに関わる大人も子供も
みんな夢を見ることができました。

本当にありがとうございます。

そして

これからもっと多くの人と
夢を見ていきたいと思えます。

...	8/28	15h00	PMS	
...	8/28	11h00	SS	
...	8/28	15h00	SS	
...	8/31	11h00	PMS	
...	8/31	15h00	GY	
...	8/31	15h00	OMS	
...	9/1	15h00	OMS	
...	9/1	15h00	SS	5
S 04 (8~11位決定①)	9/2	15h00	PMS	16
R2 (準々決勝①)	9/3	15h00	PMS	
1 (準々決勝②)	9/3	11h00	GY	
(準々決勝③)	9/3	15h00	GY	
準々決勝④	9/3	15h00	GY	
11位決定②	9/3	15h00	GY	
...

※本誌記事、写真の無断での転載は著作権、肖像権等の法律によって禁止されています。
記事や写真のお問い合わせは発行元までお願いいたします。

All rights reserved. © 日本知的障がい者サッカー連盟 2010

発行元：日本知的障がい者サッカー連盟

〒183-0015 東京都府中市清水が丘1丁目5番地8-202

電話 042-207-2686

E-mail info@nhfs.jp

発行人：天野直紀

編集人：斎藤紘一

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業



独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業